

大地をゆさぶって三発目の弾丸がとんだ。

はるか向こうで船やエントツや木片の飛び散るのが無声映画のように映った。命中したのだ。たしかに翌日船が沈んだのを確認した。

野呂小隊は同事変中に九人の戦死者を出した。野呂さんはこれらの英霊の名を軸にして保存しており、いまは折々ひもとしてはありし日の部下をしっている。以下は野呂小隊長が思い出しては語る部下の最期である。

沢田宗七上等兵 亀山市野登出身。昭和十二年八月二十一日午後三時ごろ八里庄の戦いの中、第一線中隊が敵陣地に突入したので、野呂小隊も直ちに前進準備中、第二分隊弾薬手だった沢田さんは、八里庄東北地方の敵からの小銃弾で腹部に盲貫創を受けた。すぐに応急手当てし、南趙扶鎮（河北省大城県）の師団第一野戦病院に運んだが翌二十二日死亡。

伊藤清上等兵 桑名郡多度町七取出身。十二年九月二十二日、常熟の戦いで第一分隊二番砲手として青塘の西端一軒屋の北側で小隊長と分隊長間の連絡に当たっていた。折から毎日降り続くとしと雨、午前十一時ごろ、野呂小隊長が「伊藤、軒下にはいれよ」というと「ハイ」と元気に返事して身を起こした。これが最後の笑顔だった。右前方約四百呎の敵トーチカから突然、機関銃の掃射を浴びた。野呂小隊長の立っているすぐ前一呎足らずの所に低い姿勢で待機していた伊藤さんが立ち上がりざま「ウーン」とうめいて倒れた。腹部盲貫銃創、すぐ応急手当てし、軍医を呼んで近くの師団衛生隊に收容したが死亡。

前田丑男伍長 鈴鹿市椿町出身。十三年六月二十四日、黄河決壊のため師団はまったく水びたし、後方

にも、いつの間にか大きな川が何本もでき、このため後方をしや断されてしまった。やむを得ず撤退することになったが、その前に作戦上前面の敵を撃つ必要がある。尉氏西方地区の戦闘に参加中、周場で小隊の伝令に当たっていた前田さんは「陣地変換をした」との報告を大隊長にするため、大隊本部に出発することになった。「行ってきます」と元気に五層ほどとびだしたとたん、敵小銃弾で頭部貫銃創を受け即死した。午後四時だった。

植中美直上等兵 熊野市飛鳥町出身。十三年一月入隊した現役兵で第一期の教育を受けて野戦部隊の補充用員として内地を出発、華北に上陸したが植中さんは病気ですぐ青島の野戦予備病院に入院、九月一日同院で死亡。従って野呂小隊長はこの部下の顔を知らない。

辻与一伍長 一志郡一志町波瀬出身。十三年六月、黄河の決壊で連隊は濁水の中に浸っていた。あるときは工兵隊の鉄舟で渡河し、あるときは武器と弾薬だけを舟に託し、兵は手をつないで行軍するありさまだ。高い所でも一面の湿地と化した中を六月二十五日夜から七月六日まで連日寧陵に向かって行軍を続けた。湿地を過ぎると炎天下の行軍、このため兵のほとんどが下痢を訴え、七月十二日寧陵に集結休養したとき、数人は極度に弱っていた。辻さんもその一人で同二十日入院、一時は快方に向かったがしだいに後方に下げられ、小倉陸軍病院で療養中九月九日死亡。

西井小一曹長 志摩郡浜島町出身。動員以来、第二分隊長として活躍、大別山の戦い中沙窩北側高地で九月二十三日早朝、わが陣地左側約五百呎の小高地を第十二中隊の一分隊が確保していたが、前夜敵に奪取されたので、その高地にたいし砲撃中、チェコ機銃弾を腹部に受け、すぐ野戦病院に運ばれた。たまた

ま野戦病院の近くに同弾薬部隊がいたので、分隊員は交替で西井分隊長を介抱した。二十五日午前十一時ごろ、敵の応戦が激しくなったので、西井分隊長は介抱にきている分隊員の安否を気づかい「分隊に帰ってくれ」と帰らした直後、数発の敵重砲弾がサク裂、西井さんは戦死した。野呂さんは「死の直前まで部下のことを気づかっていた西井分隊長の姿がきのうのことに思うれてならない」と回想している。

山本信三獣医務軍曹 伊勢市宇治浦田町出身。戦死のもようなど不明。

内山正一上等兵 多気郡明和町上御糸出身。

松田外記男上等兵 一志郡美杉村下之川出身。十三年七月補充員として到着、第二分隊砲手として初年兵らしく真面目に活躍していたが、大別山の戦いを終え、十月二十三日から追撃戦に移り、同月三十日、河口鎮に到着休止したが、脚気が悪化、十一月二日河口鎮師団第四野戦病院に入院し、九日死去。

野呂さんは大別山の戦闘の一ヵ月あとマラリアが原因で脚気となり、師団第三野戦病院入院、十四年十月一日、歩兵第五百一連隊付となったが十一月召集解除。しかし十九年五月、再び召集され、補充員輸送指導官として華北に出た。約一ヵ月で久居に帰り、渥美半島で終戦。

炎天下、徐州へ進撃

——水筒一本の水が“命”——

徐州へ

戦場での苦しみのひとつは行軍、しかも長途の強行軍である。

徐州―

「果てしない麦畑の中を、一日三十五キロにおよぶ行軍を、しかも連日続行したときの苦しさは、戦場ならではの経験でした」と回想するのは第九中隊第一小隊長だった間柄馨さん（故人、松阪市出身）である。

金郷、魚台の拠点を占領した第三十三連隊は翌日五月十五日から追撃に移った。目ざすは徐州である。その頃すでに日本軍の徐州大包囲網は出来上っていた。ただっ広い江蘇（こうそ）平野のあちこちでは包囲の輪を縮めていくわが軍と、この囲みを破ろうとする中国軍が衝突していた。

混とんとした戦場、郷土部隊も敵と小ぜり合いをしながら徐州へ、徐州へと進撃した。果てしなく広がる麦畑、参謀本部の地図があっても、あたりは変化のない同じ風景、行軍の目じるしがない。そのうえ、焼けつくような太陽のあつさだ。

朝六時の出発から夕方六時まで十二時間の強行軍、昼夜連続で行軍の日もあった。少ないときで一日二十四キロ、ひどいときは三十五キロも歩いた。暑い江蘇の平野にはほとんどクリークがなく、水筒一本が命の水だった。だが、炎天下の強行軍で水筒はたちまちカラになった。

冬の南京戦で無数のクリークに悩まされたことを思えば皮肉な戦場だった。たまたま部落を見つければ兵たちは血まなこで井戸を探し求め、禁止されている生水をむさぼり飲んだ。そしてまた行軍。

徐州、徐州と人馬は進む

徐州いよいよか住みよいか

しゃれた文句に振り返りや

お国なまりのおけさ節

ひげがほほえむ麦畑

リバイバルソングのひとつ「麦と兵隊」(藤田まさと作詞)の一節だが、それどころではない苦しい進撃だった。

歩きながら夢を見る――間柄小隊長も確かに経験した。夜行軍で一本道を黙々と歩き続けていると、ついうとうととしてくる。だが「歩かねばならない!」という強い意識と部隊の動きにつられて、足だけが機械的に動いている。松阪城跡のフジだな、ちぎれるほどに日ノ丸を振っている妻子の顔……ハッと夢からさめたのは、前を行く戦友の背のうにぶつかって目をさましたときだった。

炎天下の行軍とは逆に寒さにふるえた間柄小隊長の体験話は前後するが、紫金山攻略中のこと、十二月の華中は寒く、しかも山の上の夜気はからだのシンまでしみた。そのうえ、間柄小隊長らは白茆口(はくぼうこう)に敵前上陸したため、防寒具など装具はほとんど船に残してきていた。夏服一枚しかない。そんなことから思いついたのは、敵の屍のかげにかくれることだった。敵のかばねと共に寝て、泥水すすり草をかみ――当時の軍国歌謡そのままだった。

もちろん、内地では人間の死体の野ざらしなどの風景は見たこともない。戦場に第一步を踏み入れたころは、思わず顔色が変わったものだったが、いつのまにか無感覚になってしまい、自分の回りに積み重ねた死体も死臭もそれほど苦にならなくなっていた。

間柄さんは昭和四年一月、第三十三連隊第十一中隊に入隊、第十六師団司令部（京都）幕僚書記を経て十一年十一月、陸軍士官学校卒と同時に第三十三連隊第一回補充要員として華北に出征、船内で少尉。大別山の戦闘で二度目の負傷（第一回は紫金山）をして内地に還送された。以後津連隊区司令部勤務（大尉）を経て、仙台陸軍飛行学校付となり、半年後飛行場大隊長として朝鮮大邱飛行場に赴任（少佐）ここで終戦となった。

敗残兵追撃へ強行軍

——中森軍曹 徐州占領もつかの間——

徐州へ

「出発。果てしなく続く麦畑の中の進軍である。太陽が上ってくると次第に暑くなってくる。雨が降れば泥ねいと化す道は天気になると乾いて灰のようになる。黄色い土煙がもうもうと立ちのぼり、煙のそばりの中に進軍して行く部隊が影絵のようになっていたり、見えなくなったりする——」

火野葦平の「麦と兵隊」の一節である。南へ南へと麦畑の中を行軍する連隊は十七日には旧黄河線を越え、十八日には徐州西北方約十五^{キロ}の地点まで迫った。このころ師団は徐州東方をとりまく大孤山、九里山の敵陣を攻撃中だった。十九日朝、敵が退却を始めたのですかさず第三十三連隊に追撃を命じた。

徐州へ、徐州へとがん張り続けてきた将兵はがっくりきたが、直ちに攻撃前進に移った。この日南、北から猛進中の日本軍各部隊はついに徐州に達し、午前九時には徐州城の一角に突入、夕方には完全に占領



水がみつかったぞ、それ飲め

した。

徐州一帯はわが軍と、西へ東へちりぢりに退却する中国兵で文字どおり戦場はこんとん。この間にも徐州北方をウ回して隴（ろう）海線を越え、東南方へ追撃する連隊は途中宿営中の敵二個師団を発見して大損害を与え、二十日には藩塘鎮（はんとうちん）に達した。さらにそう溝向け前進中「隴海線に向かって西進すべし」との師団命令を受けた。隴海線に出るにはこれまできたところを引きかえさねばならない。連隊は直ちに徐州めざして反転、二十一日の夕刻やっと徐州にはいった。城内はわが砲爆撃の跡も生々しく、勝利に酔った将兵があふれていた。だが、連隊は一泊しただけ、翌早朝から追撃に移った。

徐州は落ちたが、退路を断たれた二十余万の敵野戦部隊がその周辺にあふれ、ひしめいていたからだ。この敵を追って、隴海線沿いに西に追撃戦に転じたのである。このころすでに師団主力は徐州西方約二百ギの帰徳（隴海線上の要衝）めざして進んでいる。

朝暗いうちに出発して、夜遅く無名部落に着いては仮眠し、また行軍、毎日三十キロから五十キロ歩く。日中は、五月も下旬、内地の真夏の暑さである。汗、ほこり、そして果てしなく続く麦畑、のどは焼けつく

よう、部落を見つけては井戸を探す、干上がって水はない。大隊に手動ポンプ式のろ水機が一台配備されているが、浄水能力は知れたもの、馬の死体が浮いたドロ水をむさぼり飲む。たちまち下痢患者が出る。食物物といえ、米はまずい南京米、おかしは現地徴発だ。



現在の中森喜男さん

こうして二十四日夜、徐州と帰徳のほぼ中間、とう山に着いた。同日朝福知山第二十連隊が占領したばかりで、まだしう煙が立ちこめていた。翌二十五日からは、隴海線の南側に回り、強行軍を続行、やっと二十七日、帰徳南方で師団主力に追いついた。

第二中隊指揮班軍曹だった名張市朝日町、中森喜男さん（七〇）は隴海線の苦しい行軍を次のように思いだしている。

「まったくひどい行軍だった。しかし脱落したら最後だ。一帯にはゲリラ化した敗残兵がうようよしていて脱落者をねらっているからだ。夜営中にたびたび兵器や軍馬を盗まれた。歩哨もつい眠ってしまう。



占拠直後の徐州（昭和13年5月）



占領直後の徐州城内

あるとき敵兵がわれわれにタバコの火を借りに近づき、日本軍だと分かってあわてて逃げて行ったこともあった。このころ内地で予備師団の第百十六師団が動員され、久居の第百三十三連隊も出発したという情報聞いたものです」

中森さんは昭和八年兵。十四年凱戦後、津連隊区司令部を経て十八年満州の第六国境守備隊へ、公主嶺で終戦、二十二年十一月復員。

睢県めざして前進

——笠井小隊長、左腕と肩を敵弾貫通——

睢県の戦闘

隴（ろう）海線沿いに西へ急行軍する連隊は、帰徳南方で師団主力に追いついた。このときすでに帰徳攻略は開始されており、ひとまず師団予備となって疲れを休めた。二十八日（五月）午後追撃命令が下った。帰徳の敵が退却を始めたので、その退路を断つ任務だ。出発後、間もなく敵と遭遇したが、敵は時間かせぎのため遠方から発砲してみせる程度でどんどん退却して行く。連隊は敗敵を追って急進撃、二十九日午後三時過ぎには寧陵に達した。同地の西方に陣地を発見、約一時間で撃破し露営した。

このころ、西方約五十キロの蘭封（らんぷう）Ⅱ隴海線の要衝Ⅱで敵の退路しや断のため南下中の第十四師団（宇都宮）が逆に中国軍に包囲されて苦境に陥り、第十六師団にその救援命令が出ていた。師団は敵の側背につくことに決め、現在地からそのまま西進、蘭封の南方に進出することにした。この作戦に従い、

連隊は三十日朝、西方約二十キロの睢県（すいけん）めざし前進に移った。先兵の第六中隊は午後二時半過ぎ、睢県の東門側部落に進出した。

第六中隊第三小隊長（准尉）だった久居市上小戸木、笠井甚吉さん（八五）はこのときの先兵長だった。先兵というのは、敵の近くを行軍するとき、部隊の前に出て警戒、搜索に当たるもので、前衛から先兵中隊が、先兵中隊から先兵が出される。先兵長は、もちろん部隊の最前線を行く。

進むにつれ、高さ二十メートルもある睢県の城壁が目の前に迫ってきた。左方から笠井（同姓）中佐指揮の同じ師団・騎兵第二十連隊主力も進んでいる。城壁の前方七、八百メートルの地点まで接近したが、敵の応戦はいよいよ激しくなる。迫撃砲、機関銃、小銃弾をまったく雨あられのように浴びせてくる。もちろん城門はびったり閉ざされている。城壁までは小さな部落が点在しているが、部落のまわりは一面、苗を植えたばかりのコウリャン畑だ。辻四五郎中隊長（四日市出身）は、

「無念だが、歩兵ではとても攻撃できない。砲兵の援護を頼もう」



占領後の睢縣城



現在の笠井甚吉さん

と、くちびるをかんだ。さいわい近くに部落がある。中隊はそこから後方の砲兵に電話連絡し、援護待ちすることにした。

しばらくすると辻中隊長が、「どこか高い所はないか、敵情を見たい」といいだした。

「道の反対側に屋根の高い民家があるそうです。足場を作ります」

笠井小隊長はす早く軍刀、双眼鏡等はずすと民家のカンバンを一枚はがし、左わきに抱えて通路にとびだした。その瞬間だ。

ビュッ／＼

一発の敵弾が笠井小隊長の左胸をかすめ、左腕と肩のつけ根を貫通、ひと握りの肉と骨を食いちぎった。

「うむ／＼」

がっくりひざを折った笠井小隊長は反射的に右ポケットの懐中時計をとりだし、

「十五時三十分／＼」

後ろから抱きおこす看護兵に伝えた。あいにく中隊に軍医がおらず、野田富士男衛生上等兵（尾鷲市出身）が手当てを急ぐが出血は止まらない。気が張っているのか痛みは感じないが、左腕は冷たくしびれ、全然感覚がない。鮮血が吹き出しつづける。

「軍医、前へ！」

と叫ぶ声を同じ場所に停止していた笠井騎兵隊長が聞きつけた。

「負傷兵は歩兵だから」

と報告する者があったが、

「歩兵隊であろうと助けるのが軍医のつとめだ」

と笠井中佐は配属の軍医を呼ぶ。

「行つてやれ」

「ハイ」

若い軍医少尉が笠井小隊長の所にかけてつけた。このころ辻中隊長は、

「笠井の遺言を聞いてやれ」

と看護兵に命令したところだった。

敵前の命はかなし

——片山曹長、笠井小隊長見舞い後、即死——

笠井甚吉准尉の出血は容易にとまらない。辻中隊長が憂慮しているところへ騎兵隊の軍医少尉がかけつけたのだった。その若い軍医は、笠井小隊長の青い顔色を見て、

「ひどい出血だ」

とつぶやくと、手ぎわよく笠井小隊長の軍服と下着を引き裂き、傷口に湯のみ茶碗いっぱいほどのヨードチンキをぶちまけた。八本の血管を一本一本しばらくと、ブドウ糖をうち、ガスえそ、破傷風の予防注射をうった。

「これで大丈夫、お大事に」

そういい残してすたすた自分の連隊に帰って行つた。この間わずか十二、三分、辻中隊長は驚いた。

「みごとな腕だ。後学のために名を聞いてこい」

聞くと京都帝大の外科専門の博士（名前不詳）だった。こうして笠井小隊長は奇跡的に助かった。

応急手当がすすむと、民家に横たえられた。そこへ同じ大隊の本部書記、片山秋雄曹長が見舞いにとんできた。笠井小隊長が教育した「できる」男だ。

「小隊長殿、しっかりして下さい」

「これしきの傷でへこたれはせん、君こそ命を大切にしろよ」

「小隊長殿、自分は本部詰めだから大丈夫ですよ、それよりどうか元気で内地へ帰して下さい」

ニコリ笑顔を見せて帰っていった。（相変わらず元気なやつ）うなずいて目を閉じた。

だが、敵前というもの、人の命はわからぬもの。片山



片山秋雄曹長

曹長は民家を一步出たとたん、のどから血を吹いてのけぞった。のど笛に貫通銃創、即死である。

笠井小隊長は、自分のそばに横たえられた片山曹長の死が信じられなかった。その夜、笠井准尉は野戦病院に後送され、ついで天津で左手のつけ根から切断手術を受けた。「この日の夜襲で戦友の多くが負傷し、天津に送られてきたが、ガスエソで次々死んでいった。私の場合は、負傷した時刻(戦闘中の混乱時では、とてもこんなていねいな手当てはされない)」と、名医が奇跡的に助けてくれた。あの軍医の名はついに知ることができなかったが、いまだに感謝しています」と語っている。

大正八年現役志願、十四年八月、退院して召集解除、日赤県支部事業課長、県傷イ軍人会一志郡会長や町総代もつとめた。

○ ○ ○
本隊の戦闘は――

唯島の城門の上には望楼があり、さらに城門の上にくり抜いた銃眼からチェコ機銃、小銃で狙撃してくる。第六中隊のとりついた東側の部落と城壁の間はわずか二層ほどのクリークをはさみ、五層ばかりの至近距離、やがて戦闘力のない騎兵は退き、第七中隊(川戸正巳准尉、亀山市辺法寺)が増加された。攻城は砲撃によって城壁を破壊するのが正攻法だが、すでに第六中隊が接近しているので援護ができない。第一線は、城壁上からのチェコ銃座にクギ付けされたまま日没を迎えた。

このとき勇敢にも連隊砲一門が、敵前三、四十層の地点まで進出してきた。城門のチェコがあわててはえたが、防楯がはねかえす。連隊砲はすばやく砲口を城門左の銃座に向けると、直接照準で第一発をぶち

込んだ。城壁から身を乗りだして射撃していた敵兵が銃座もろとも吹っつぶ。続いて二発、三発、城壁はくずれ落ち、射撃がやんだ。

突撃口が開かれたと見た工兵隊がすかさず前進、クリークに煙幕を張る。たちまち黄煙が城壁を包む。待ち構えていた第一線はクリークを渡り、突破口からかけ上がる。これを見た敵はいっせいに手投げ弾を投げ、味方はつぎつぎともんどりうつ。だが、すでに浮き足立っている敵は、第六中隊第二小隊長の稲垣勇曹長（久居市）らが軍刀をひらめかせてかけ上るとあわてて退却して行った。こうして東城門を奪われた敵はその一部でなお抵抗の気配を見せたが、翌朝、日の上るころには一兵残らず城外に退却していた。

第七中隊長だった川戸さんは、「城壁をかけ上ったところで手投げ弾に両眼をやられ、同じように負傷し



睢縣城占領後大休止する我三十三連隊勇士

た部下三十四人とともに後退しました」と回想している。

この戦闘における第十六および第十三師団の大別山突破作戦間、敵に与えた損害は遺棄死体約一万五千に及んだが、我々の損害もまた戦死者約千、負傷約三千四百、合計約四千四百名を数える激戦であった。

○

○

○

それでは本稿の目的に副い郷土部隊關係に話をしぼう。大本營は八月二十二日「中支派遣軍は、海軍と協力して漢口付近の要地を攻略占拠すべし。この間なるべく多くの敵を撃破すべし」と発令した。

中支那派遣軍は、第二軍を八月下旬からまず光州、商城の線に進出させ、以後信陽、漢口北側地区に向かう前進を準備させた。一方第十一軍を敵時瑞昌、徳安の線に進出させ、九月中旬から武漢および南方粵漢鐵道に向かう前進を準備させた。第三十三連隊の属する第十六師団が命じられた任務①葉家集到着とともに以後家集、商城北側から商城に突進し、敵の退路を断すべし②九月二十二日以降、随時商城を出発、大別山系を突破して宋埠、黄安方向に進出すべし、というものであった。

第十六師団の正面の敵兵力は六安―かく山の線に二十六集團軍（一一軍、一九九師）固始―葉家集―商城の間に七十一軍（六一、八八、三六師）沙窩―麻城方面に二集軍（三〇、四二軍）と七十一軍の計四個軍九個師一個旅団、総勢二十余万の大軍であった。

中国軍得意の「洪水戦術」からやっと脱出し寧陵、帰徳に駐屯していた連隊に出動命令が下ったのは八月二十三日だった二十四日帰徳から列車に乗り込んだ将兵は隴（ろう）海線を東に進み、徐州に到着、こんどは津浦線で蚌埠（ほうふ、またはバンブー）まで南下、そこから難行軍を続け、九月四日廬州にその

兵力を集結した。そのころ廬州では住民の間にコレラが流行しており、一部の兵士が感染、このため消毒、検便など必死の防疫体制を敷くという一幕もあった。しかし戦闘、悪疫になれた將兵には同地での三日間は願ってもない休養で、兵器の手入れや軍服のつくろいなど、のんびりした生活を味わい、英気を養った。七日午前六時半、連隊は廬州を発った。まず六安をめざす。いつしか華中も初秋だが、日が上るとまだ暑い。汗と土ぼこりにまみれ、一日四十^{キロ}も歩く。道の両側に点在する民家はどれも土レンガだけを残し、明け落ちていく。日本軍の行軍を苦しめるため中国軍がとった焦土戦術によるものだ。

このあたりからゲリラ戦術も激しさを加えてきた。廬州駐屯中「狼誘団」(わいゆうだん)の謀略にかかって「戦死」した兵もあった。つまり、色じかけで「一人一殺」を狙う女子ゲリラ隊で、將兵は嚴重な注意を受けた。行軍また行軍を続け、十日に六安へ到着、次いで十二日には葉家集(ようかしゅう)へ達した。この付近はすでに先進部隊が通過しており、敵陣の残骸が激闘を物語っていた。廬州を出発以来約四百^{キロ}、連隊は十六日の夕刻、やっと商城(しょうじょう)へ入城した。

商城はこの日午前十時四十分、先進部隊と飛行機の立体作戦で占領したばかり。城門には日章旗がひるがえり、城内は日本軍であふれていた。連隊は同地の西側地区の民家などへ宿営した主力(第二大隊欠)はここでしたし待機である。

演習時はオニ上等兵

——松原さん、新兵“しごき”に感謝——

睨県の戦闘

自分の負傷体験から演習時に新兵をしほりあげたためけむたがられたが、戦後ぶじに復員したその兵から感謝されたという話題。

度会郡度会町注連指の松原鶴一さん（死去）はその体験を睨県の戦闘で得た。一等兵で第五中隊に属していた。

中隊長は村岡恒蔵中尉（多気郡多気町）第二小隊長は坂倉健一少尉（大別山で戦死）分隊長は大塩重雄軍曹（四日市出身）だった。戦闘のあらましは、すでに詳述したのではぶくが、クリークまで進出した第二小隊は「左の城壁を突破して前進せよ」との中隊命令を受けた。

分隊は大塩軍曹以下十人前後軽機射手の松原一等兵は、柳の下に軽機をすえ、浜口忠雄上等兵と交代で射撃した。しかし敵の必死の抵抗を受け、日没となってしまった。午後六時ごろだった。あたりはすでに真っ暗だ。敵前約五十呎、城壁にくりぬいた銃眼と城壁上から相変わらず猛射を浴びせてくる。松原一等兵も次第にあせりが出てきた。

敵情はどうなっているのだろうか、と、ふとからだを浮かした瞬間、頭上に迫撃砲弾のうなりを聞くと同時にみけん、鼻、足に破片を浴び、のけぞった。砲弾は柳の木にひっかかり、サク裂したもののらしい。

このとき「動作は鈍くとも、姿勢を低くせよ」とキモに命じた。

松原さんは常州まで従軍したが傷が悪化、後送された。十二月退院、上等兵に進級とともに翌十四年四月中旬まで、久居で新兵教育に当たることになった。一月に現役兵が入隊してきた。屯営での生活は兵に手をあげたことなどなかったが、演習となるとしぼり上げた。一にも二にも「姿勢を低くせよ」なかでも多気郡多気町出身の清水多吉二等兵は何度も梅の木の枝で頭をたたいた。

「清水、頭を上げるな、もっと姿勢を低くせよ」

こうして厳しい訓練を受けた兵たちは野戦へ出て行った。

松原さんはその後朝鮮の警官となり、終戦後内地に引き揚げ、農林業に従事した。混乱期のある時期、町でふと清水一等兵に出会った。松原上等兵は（あのときしほってあるから、きょうは仕返しされるのかしら）と覚悟を決めた。すると、

「松原上等兵殿ではないですか」

彼はニコニコしながら近づいてきた。

「覚悟はできている。思いきりぶんなくってくれ」と顔をつき出すと、清水一等兵は、

「何をいうのですか。わたしは、あなたのおかげで



命拾いをし、こうして無事に復員することができました。演習時はひどい上等兵だとうらみました。しかし野戦にでて負傷して初めて分かりました。もうほんのちょっと頭が高かったらやられていたでしょう。姿勢が高かったため戦死した同年兵を数多く見てきました」

清水一等兵はどこやらで酒をくめんしてきて、松原上等兵にサカズキをすすめたという。

「戦争は地獄です。これほど悲惨なものはありません。再びくりかえしたくありませんが、無事にかえしてもらった私としてはよい体験になりました」と生前くりかえし語っていた。

四散する敵を追撃

——開封の東南20^{キロ}に迫る——

刑口付近の戦闘

翌六月一日午前三時過ぎ、第三大隊は行動を起こした。だが第一線中隊が敵の一線陣地に突入してみると、すでに敵は退却したあとだ。あっけなく占領し、乾パンの朝食をとった。朝になると敵は主陣地から迫撃砲弾を集中しはじめた。大隊は奪ったばかりの無名部落を撤退し、攻撃前進に移る。部落を出るとリンゴ畑があった。午前十時には刑口部落の手前四、五百^{メートル}に迫った。機関銃中隊はリンゴ畑に陣取った。堤千里少尉は眼鏡を出して敵情を探る。双眼鏡をのぞいたまま、左方から右方からだをひねったときだ。がくつとショックを受けた。

「だれだ、俺にぶっかった兵は……」

といかけ、口を押えた。鮮血が口からあふれ、視界にキラキラ星がとび、腰をおとした。

「中隊長殿がやられたッ」

指揮班の下士官（氏名忘却）が叫び、かけつけた看護兵が軍服の胸をさいた。意識もうろうの中で軍医の、

「こりゃ、あかん」

安田衛生曹長の、「カンフルとトロンボゲン（内出血止め）を注射しますか」

「いやむだだ」

「うっただけうっておきましょう」

こんな会話を聞く堤少尉は、「どうせダメならモヒを打ってくれ」

と訴える。タマはのど元、食道のすぐわきから入った。右肺をぬき、右腕にとまっていたのだが、このときは出血も割合少なく、患部がはつきりわからなかった。

この間にも大隊は、大隊砲、機関銃の猛射撃の援護で、一線中隊はじりじり前進、約二百呎に迫ると退却を開始、正午すぎには刑口部落を占領した。

重傷を負った堤少尉はその夜遅く杞県の野戦病院まで後送された。さらに負傷十二日後に帰徳まで下げられ、ここで本隊追及中の安田軍医に会い、

「口からの出血が二週間で止まらなければあかんぞ」

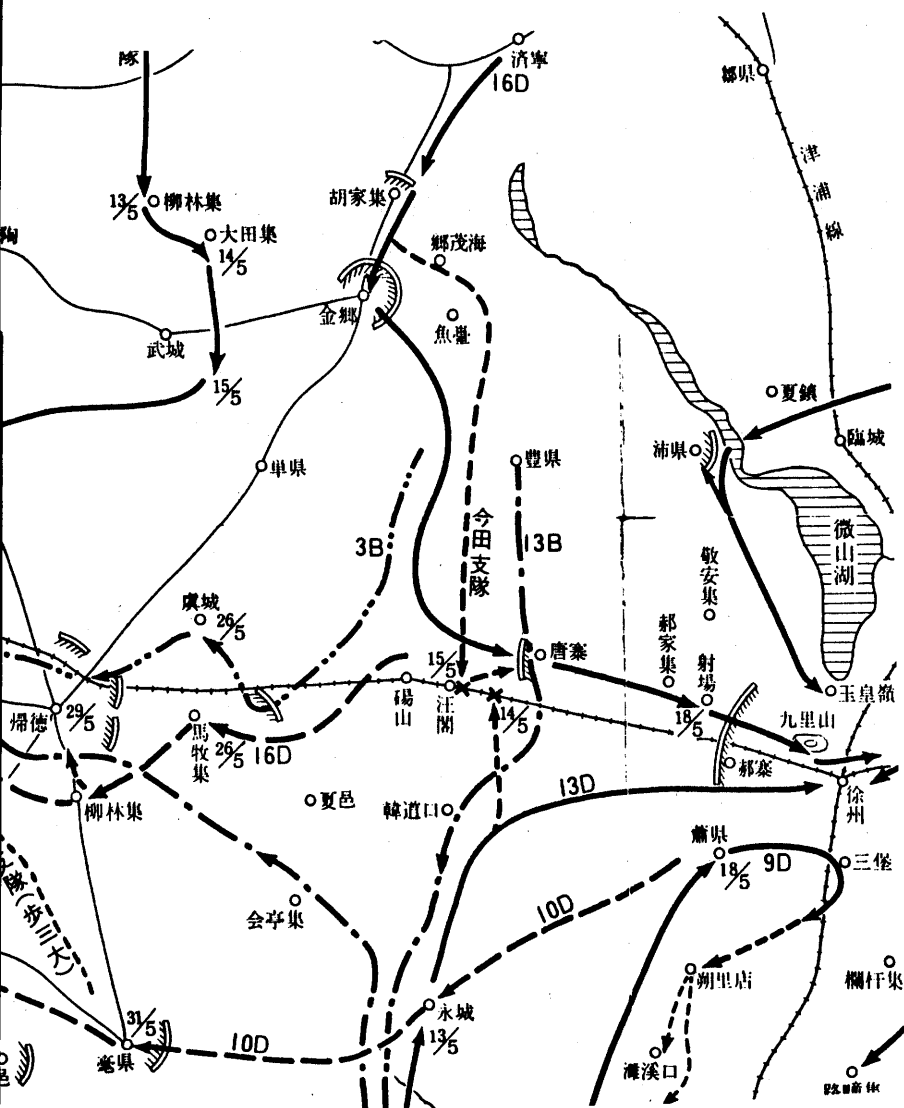
といわれ、覚悟を決めた。済南でタマを摘出、出血は相変わらずだったが奇跡的に命をとりとめ天津を

經て大阪日赤病院に送られた。「七月四日大阪港に入った患者のうち十七人が胸をやられた者だった、化のうもせず助かったのは私ともう一人だけだったそうだ。ふだんから酒をのまなかったのがよかったらしい」と回想している。堤さんは大正八年第五十一連隊入隊、負傷回復後は第三十三連隊補充隊本部付き、三重防空および警備主任兼志摩水産配屬將校を経て神宮警備大隊長もした。少佐。

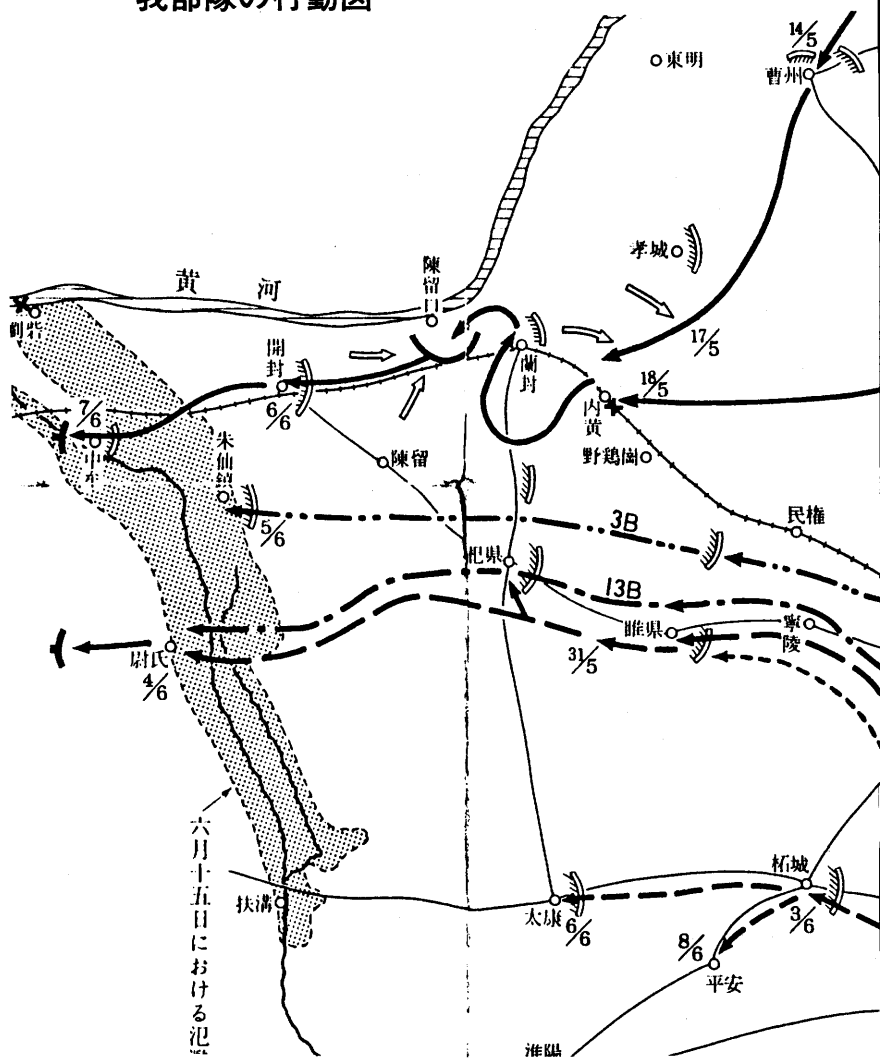
○ ○ ○
一方この日、連隊主力は師団主力を追って前進を続行、杞県東南方約六^キの地点で露營した。翌二日、午前五時から西南方へ約八^キ移動したが、わが軍の戦況はかどらず、師団予備のまま後令を待つて休止した。やがて杞県周辺の敵が総退却を始めたので午後一時半、師団命令により追撃隊となって前進を始めた。日没ごろ右手に敵の大縦隊を見つけ、大きな打撃を与え、午後九時過ぎ小部落で露營した。

三日も連隊主力は午前五時半出発、杞県、蘭封から退却してくる敵を追って西進を続けた。正午ごろ第一大隊は西掌店（せいしょうてん）部落に入ろうとする敵部隊を待ち伏せ、わずか十数分でセン滅した。第二大隊方面でも退却中の敵部隊とぶつかり、無電機はじめ兵器弾薬を分取り氣勢をあげた。

こうして連隊は右に左に退却中の敵を追って前進を続け、その日夕方には隴（ろう）海線上の要衝開封（かいふう）の東南約二十^キの太平崗（たいへいこう）部落にはいり露營した。



我部隊の行動図



敵兵、闇にまぎれ逃亡

——太田中隊長、氣を許したのが失敗——

杞県南方の追撃

連隊の追撃は続く。翌六月四日も開封の敵を包囲するように西南へ進撃する。雨季に入ったのかきょうも朝から雨だ。翌五日には旧黄河の流れに出た。渡河して夕方には開封西南方約四十^〇の尉氏（いし）にはいった。五月九日の済寧出発以来徐州攻撃、そして隴（ろう）海線沿いの追撃と強行軍に明け暮れ、この間山東、江蘇、河南の三省にまたがる二百数十^〇の野戦をかけめぐった。伊勢男児の健脚ぶりを十二分に発揮した行軍であった。

○

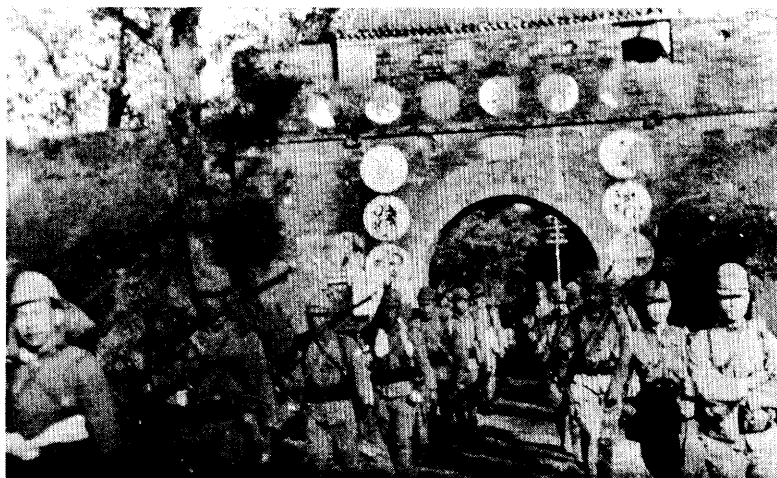
○

○

第三大隊は大橋にはいった。第九中隊長だった津市船頭町三三八一、P—一〇三—、太田雄三さん（た）のエピソードを一つ紹介しよう。

追撃中の大隊は、やっと大橋城にたどり着いた。途中捕えた数十人の捕虜は近くにいた師団司令部に護送した。大橋城のまわりは一面の畑地だ、地味は豊かではなさそうだが野菜が植えつけられていた。細い畑道はかなり急ぎながら自転車を通り過ぎる男がみえた。声をかけると相手はぎょっとしたらしいが、すなおに自転車を下りた。「ニイ・トントン・イヤン」（日本人と同じ顔していらあ）

と白い歯を見せた。



我第三十三連隊大橋に進出

連日の行軍で兵隊たちは服も顔も泥だらけ、彼は味方の軍隊とばかり思っていたらしい。

「どこへ行くか」

と太田中隊長は聞いた。

「休暇が出たから近くの部落に住んでいる女房に会ってくるのだ」

彼はけろりと答える。太田中隊長も兵隊たちも（戦時中というのにお国柄だなあ）とうらやましく思い、「けっこうなことでだ」といったが、

「残念だが、日本軍に出くわしたのが運が悪かった。釈放するわけにはいかない」

軍隊は甘くない。愛児が死にかけていようが、何がどうあろうが出会ったからには捕虜か射殺以外にない。彼はもじもじと逃げる気配を見せたが、すぐにあきらめた。名は黄といい上等兵。背が高く二十一、二歳、真新しい八インチの自転車を手軽に乗っていた。

大橋城に入城すると太田中隊長は黄を身近において自分の

部屋に寝させた。おとなしい男で、太田中隊長の洗たくや走り使いなどこまめに身の回りの世話をやいた。太田中隊長も気を許し、通訳に使えるぞと大切にいつかつた。だが一週間もたったある日、ヤミにまぎれて見事逃亡していった。

「気を許したのが失敗だった」

と太田中隊長は頭をかいだが、上田大隊長から、

「おとなしい男とはいってもやはり敵の兵隊さ。やつが太田君を殺すつもりならいつでもやられたのだけ」と大目玉を食った。

武器を構えて相対するときは別だが、太田中隊長はいつも中国人に親しみをもって接した。これが失敗だったが、黄のことばがほんとうなら（いまごろ女房と会っているだろうなあ）と表情をくずし、うらやましく思ったものだ。

敵弾の洗礼浴び後退

——第九中隊爆破のごう音を聞く——

京漢線の爆破

師団司令部の置かれた尉氏（いし）西方に駐とんした連隊は戦闘と長い苦しい行軍から解放されて久方ぶりにのんびりした。天候は毎日うとうとしく、食糧も少なかったが、師団はどうやら隴海線の警備にくらしいと噂がとんで将兵たちの気分もなごやかだった。戦死者の中隊葬も行われた。

六月十三日、尉氏西方約十五キロの大橋に旅団司令部とともに駐屯していた第三大隊（上田孝少佐）に突然「ただちに行動を起こし鄭州（ていしゅう）——新鄭（しんてい）間の京漢線鉄道を爆破すべし」との命令が下った。

同鉄道は北京—漢口間千二百キロを結ぶ大動脈で、東西に伸びる隴海線とは鄭州で交差しており、戦略上の価値は大きい。漢口攻略の手をのばしつつあった日本軍としては、敵の南下を防ぐため同線をしゃ断する必要があった。

当面、鄭州付近には二個師の敵がいる。大橋から京漢線までは直線距離にして約十キロ、その間は友軍も進出しておらず、まったくの敵地。第三大隊は全兵力をあげて一気にこの間を突破、爆破と同時にさっと引きあげる作戦だ。急拠出動準備を終えた大隊は、同夜八時過ぎ第一中隊（松野亮作大尉）を先兵に前進を開始した。月はなく、わずかに星あかりだけ。もちろん月明のないことは計算済みであった。

○

○

○

敵地進入に先立ち、大隊は斥候を出し、鄭州へ通じる道路の敵情を偵察させた。だが、どの斥候も無事にはもどってこなかった。そこで将校斥候を出すことになった。第九中隊第一小隊長、土井俊一少尉、同第一分隊長鈴木勉軍曹、館軍曹はじめ東準一上等兵ら全部で十三人で行くことになった。

地図を頼りに途中の部落を搜索中、夕方になってある部落の前方約百メートルの地点まで引きつけられ、突然襲撃を受けた。たちまち兵一人が即死、山本上等兵が足に貫通（後刻出血多量で戦傷死）、館軍曹が腕に貫通、東上等兵が胸に貫通銃創を受けた。行動力のぶった一行は、まったく敵弾の洗礼を浴びるままだっ

た。だがやっとのことで後方の安全地帯まで退くことができた。

胸を射ぬかれた東上等兵は、

「おれは時間の問題だ、かまわずに行ってくれ」

苦しい息の下から、くりかえし時計とお守りを故郷に届けてくれと差しだした。

「何をいうか東、しっかりせい、傷は浅いのだ」

鈴木軍曹らが励ました。

「おれにかまわず行ってくれ」

東上等兵はくり返し言いながら十一時十五分息を引きとった。

そのあとすぐ、京漢線爆破のごう音を聞いたのだった。その前に一行は後方に連絡をだしていたが、なかなか帰ってこなかった。やむなく死体二体と館軍曹を戸板にのせ、後方に下がる途中、第三十八連隊の衛生隊に遭遇した。

こうして駐屯地の大橋に帰り、東上等兵らの死体をダビに付しているとき、黄河が決壊（次項）濁水がきたので土俵を積み、大急ぎで死体を焼き、三時間遅れて本隊を追及した。

○

○

○

話は前後するが、第二大隊大隊砲小隊に現役兵で属していた多気郡大台町佐原四六九、大藤京輔さんは次のように徐州行軍中の思い出を寄せている。

「帰徳付近だったと思う。部隊は昼食のため、ある水のない川の付近に大休止した。すると約二百人の対

岸を朝から同じように行軍している部隊も止まって昼食をとりだした。どこの部隊かといぶかったがともかく調べてみることにした。敵だった。すばやく四丁の機関銃を据え、一斉射撃を浴びせた。不意討ちされた敵はクモの子を散らすように逃げて行った。だが調べてみると敵の遺棄死体は意外に少なかった。「タマは当たるようで当たらないもの」だと痛感した」

鉄橋に真つ赤な火柱

——太田中隊長、安堵のため息——

京漢線の爆破

大隊主力は日没とともに行動を起こした。第九中隊長だった太田雄三さん（六九）〓津市船頭町三三八一、P1一〇三一〓の話にうつろう。

月のない夜だった。わずかに星明りがあつたが、ヤミ夜といった方がよい。いわゆる隠密作業であり、



軍服姿の太田雄三さん

まったくの無言の行、しかも急行軍だ。兵士たちは小銃だけの軽装、松野大尉（のち大別山で戦死、太田さんの親友、別項）率いる第十一中隊が先兵である。途中の部落で小休

止した。太田中隊長は「部隊が行動を起こしたら知らせてくれ」と部下に言いつけて腰をおろした。いつものまにかうとうとしてしまった。

クツの音を聞いたようで、はっと目が覚めた。あたりをうかがうと、しんとしている。指揮班と二、三の兵隊しか残っていない。主力は出発してしまったのだ。あれほど注意しておいたのに部下も眠ってしまったのだ。兵士たちも疲れているのだ。しかっても仕方がない。だが、ぼやぼやはしておれない。鉄道の方角はわかっているが、地図を持っていないうえやミ夜だ。地面を探すと左の方向へクツ跡が続いている。あわててクツ跡をたどったが、部落の中ほどで見失ってしまった。

「困ったぞ」しばらく途方に暮れた。そのときだった。千原も前方だったろうか。ヤミの中にチャリと火が見えた。

「あれだ」

兵士たちも元気が出た。それは厳禁されていたタバコの火だった。(戦時中、夜間空襲にスパイがタバコの火で合図するといわれたものだが、ヤミになった兵士たちにとってタバコの火はあらゆる場合重要視された) 太田中隊長らが本隊に追いついてはどなく、十一時過ぎ京漢線前方五、六百歳の地点に到着した。

大隊主力はそこで停止、敵襲に備えて戦闘隊形に展開した。爆薬を背にかついだ工兵一個小隊は護衛の第十一中隊とともにヤミの中に消える。大隊砲六番砲手だった浜口四郎さん(六八)「鳥羽市本町」は「われわれも砲二門を馬で引っ張って参加、砲弾を込め水平射撃のできる態勢をとっていた」と語っていた。じつと目をこらせば、前方のヤミの中にひときわ黒く横たわっている怪物が京漢線の鉄橋だ。兵士たち

はじつとかたずをのんで、いまや遅しと爆破の瞬間を待つ。

およそ三、四十分もたったろうか。ドカーンッ。突然、大音響と同時に真っ赤な火柱がヤミをつんざいた。

「やった！」

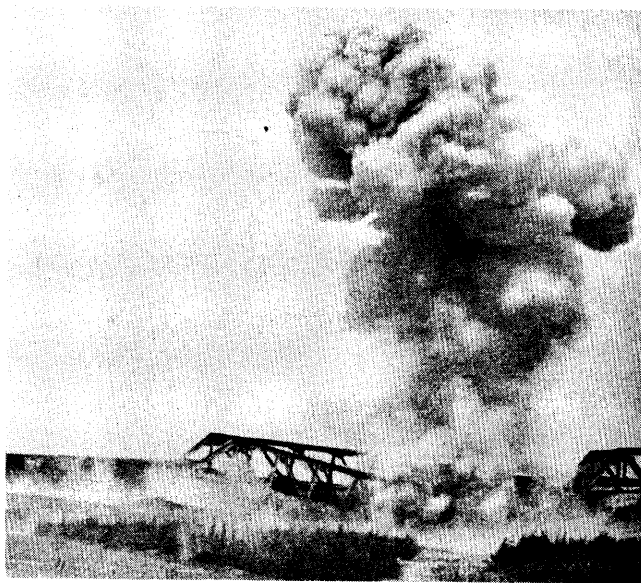
兵士たちは思わず叫ぶ。太田中隊長も安堵のため息をついた。破壊が終われば、敵地に長居は無用だ。大隊はすぐ駐屯地の太橋に引き揚げた。

太田中尉率いる第九中隊だけは、太橋から約二キロ敵中に突出した門楼任（もんろうにん）部落に残って警備に当たった。

将兵はメリケン粉で作ったダンゴを焼いたり、油あげにして食ったところ下痢患者が出た。

そんな折、敵の爆撃を受けた。迫撃砲の集中攻撃だ。兵力の乏しい太田中隊は人形を作って擬装した。

このとき分隊長だった鈴木勉軍曹は「さっきの斥候で戦死した東準一上等兵の遺骨を守りながら、おれがここで死んだら東の遺族に申し訳ない」と、いら



京漢線黄河大鉄橋爆破成功

いらしながら応戦したと語っている。

大隊本部に連絡のとれないまま、まる一日たった。その間に戦死傷者も出た。そのころ大橋では「門楼任付近で銃声が聞こえるぞ。太田中隊に変事があるにちがいない」と察し、やがて上田大隊長を先頭に救援隊が到着、上田大隊長は旅団長からもらったというビールをわざわざ持参「おれは飲まぬから」と太田中隊長以下兵士たちに分配した。

このあとが黄河の決壊で太田中隊はもちろん、第十六師団は濁水と悪戦苦闘、兵士たちは頭に銃と荷物を乗せ、さながら「大井川道中」で済南向け撤退した。太田中隊長は輜重隊の車にイスを置き、それに乗って行軍したものだったと回想している。

第七章 中国軍洪水戦術

黄河決壊の非常手段

——第十六師団、人造湖に孤立——

第十六師団は、司令部を尉氏（いし）に置き、その兵力の集結にかかった六月十四日朝、突如「黄河堤防決壊！」という通報を受けた。開封をおとし、中牟（ちゅうむ）も占領し、なお西方に猛進する日本軍、これを食いとめるため、中国軍は隴（ろう）海線中牟西方二十キロ付近で大黄河の堤防を数カ所にわたって破壊するという非常手段に出たのだ。二、三日前の雨で増水していた黄河の濁流は、尉氏東方の旧黄河に沿って奔流しはじめ、わずか五日間で河南平野を水中に沈め、三百平方マイルの大人造湖を作ってしまった。師団司令部は、あわてて各部隊に「至急安全な場所に避難すべし」と急報したが、すでにそのとき第十六師団は大湖沼のどまん中に包まれてしまっていたのである。

徐州会戦が漢口攻略戦の一大前衛戦であったことは既述のとおりだ。故伊藤正徳氏の「軍閥興亡史」によると、大本営の作戦（漢口攻略）では、徐州からの敗敵を西方に長追いせず、南下すること（六安付近

に集結予定）が方面軍に指示してあった。ところが北支那方面軍司令官寺内寿一大将以下、山下奉文参謀長、西尾寿造第二軍司令官はこの命令を無視、第十六師団を先駆として鄭州方面へどんどん追撃、西進を続けた。手ぐすねひいて待っていた中国軍の「洪水戦術」にまんまとかかってしまったわけである。このため漢口作戦は一ヵ月遅延、西尾軍司令官は左遷され、軍司令官は東久邇宮中將に、参謀長は町尻量基少將に代えられた。

まったく「寝耳に水」とはこのこと、將兵は大騒ぎ、わずか一時間そこそこで出発準備を整え、移動を開始した。同日夕方には、尉氏西方約二十*の旧黄河、砂丘地帯まで避難し、宿営した。食糧補給の見込みはなく、翌日から一日一食にせよとの命令が出た。手持ち食糧はわずか五日分程度、これを半月ぐらいに食いのばせというわけだ。砂丘地帯も、セキを切った濁流には安全ではなかった。すぐ移動した。敵襲に備え、師団として戦闘体形を整えるためでもあった。移動は各大隊ごと（分散してい



濁流の中転々と移動する連隊

た)に行われ、一週間の間に五、六回も移動した隊もあったほど。目的の高台までの移動がまた一苦労だ。腰や胸まで没する水。頭の上に背のうや衣類をのせ、文字通り“大井川道中”を続ける。食糧はない。飲む水は敵の死体の浮いた濁水だけだ。水中行軍で腹を冷やしたせい、下痢、赤痢患者が急激にふえだした。

○ ○ ○
そのころ金丸吉生さん(百五銀行頭取)は師団経理部の主計軍曹だった。

「一夜明けたら水の中にいた。すぐに尉氏の城門を閉じ、土のうを積んで水を防ぎ、ろう城となった。折から麦秋で、麦の穂をもぎ取っては粉にして食ったが、野菜が欠乏して壊血病やアメルバ赤痢が発生しだして、どうしても野菜を入手する必要が生じました」と回想する。

意を決した金丸軍曹は工兵の鉄舟を借り、四、五人の兵を連れて野菜を探しに出かけた。一面の濁水、わずかに点々と姿を残しているのが部落だ。すっぱだかの兵士たちは鉄舟をあやつって部落付近を探して回る。昼ごろ、城壁のある部落の付近でハクサイを見つけた。

「しめた、隊に帰って報告して、取りにこさせよう、とりあえず持てるだけ持って帰ろう」

金丸軍曹がよろこんだ時だった。城壁の上から射撃を浴びせられた。敵がいたのだ。金丸さんたちは濁水にもぐって命からがら逃げ帰った。やっこの思いで尉氏城の近くにたどりついて、手を振ると、敵と間違えられて友軍の発砲を受けた。

この野菜探しのとき、金丸さんが長い間連れ歩いて石川さんという通訳を失った。城壁からの射撃で

やられたらしいと探しにもどると、腹を十文字に切られ、目をくりぬかれ無残な姿でみつかった。「戦争は生きるか死ぬか、いつも瀬戸ぎわに立たされていて、いろいろなことがありました」

こうした戦線の幾日かに私が得難い体験をした一つ、二つを聞いていただきたい、と金丸氏は次のように話す。

(一) 生仏に寝台をゆずった話

それは昭和十二年十二月初め、南京攻略戦の最高潮の時、揚子江の下流「白卯江」へ敵前上陸した部隊に従って上陸し、常熟・無錫と進撃、南京を前にした丹陽での出来事でした。

後方からの援護砲撃が耳をつんざき、前線の機関銃や、小銃の音が豆を煎るように聞こえる。最前線の真近に到着したわけです。こよい一夜と思って大きな門のある空家へ入り込み、夜の闇の中でやっと一室の大きな寝台にもぐり込んで軍装のままうたたねをしまし



支那事变徐州戦のころ金丸軍曹の軍服姿

た。

ところが夜半に懷中電燈を持った将校が入って来て「おい／貴公のこの寢台をあけろ／今からここで貴いお方が休まれるのだ」と頭ごなしに大声で命令されました。こちらにもむっとしたが肩章が物をいう軍隊のこと、しぶしぶ起きて隣の藁小屋へ行って豚の子のように藁の中へもぐりこんだ。翌朝、早々に出発して前線へ向かうとき、念のため昨夜我輩の寢入りばなを起こした無礼な奴の名をきいて、成る程これは仕方がないわい、と思った。その人こそ今の西本願寺の門主、大谷光照師であつたのです。当時は貧相なやせた見習士官であつたと記憶しています。まさか生仏様が私の体温の残つた寢台のボロ布団にくるまって休んで下さるとは、ありがたいやら睡眠不足でいまましいやら複雑な気がしましたが、こちらは何時仏にされるかわからん体であり、前線へ出発する前に生仏様によい功德をほどこしたわい、と考えたらしいささか気が楽になりました。

(二) 中支で昔をしのぶ「大井川渡渉の体験」

中国の昔、戦国時代の「戦略史」にこんな事が書かれているそうです。「中支の中牟涼付近で戦況が不利となり、敗戦の危険がある時には黄河を決壊させ、水を平原に引き入れると敵軍を洪水の中におとし入れ、戦況を好転せしめることが出来る」と。

昭和十三年春の事です。徐州占領の勢をかって追撃戦となり、隴海線沿線を敗走する敵を追って鄭州まで突っ込めとの命令で日本軍は急追撃にうつりました。

私も連日連夜の強行軍で一日平均四十キロは歩いたと思います。頃は五月初旬、尉氏という一部落に入って休止していると部落の周辺にどんどん水が流れこんで来ました。見る見るうちに部落周辺全体が一面の水になり刻々と増水して来ます。部落の四方の門を閉じて土のうを積んで浸入を防ぎ、不安のため城壁でみんなが監視にあたりました。驚いたことに一夜にして見渡す限り湖のようになり、部落だけが諸々に点々と散見されました。情報によると蔣介石が「古史」にのっとり黄河を決壊したため、その水が全部流入して来るとのことです。結局ここで足止めされること約三週間、食糧不足のため飛行機からの食糧投下をうけたり水没中の小麦を刈り取って城壁の上に並べて乾かし、それを粉にして団子を作るなどして過ごしたものの栄養失調と野菜不足のため病人続出、とうとう私もアメルバ赤痢の床につきました。

かれこれしているうちに工兵隊の鉄舟に助けられて深い処は舟で、浅い処は裸になり自分の荷物を全部頭にのせたり、軍刀を天秤棒代りにしたりして昔の大井川や富士川を渡渉した雲助のような行軍を四、五日続けてやっと陸地へたどりつき、無事「開封」という処へ着きました。この時の事を今回想すると、よくもたえられたものだとの感一入です。

これを日本軍は黄河の撤退作戦と称していました。

(三) 遼唐使ゆかりの上陸地点

昭和十三年秋、北支に駐留中のことでした。支那の昔の物語「邯鄲夢の枕」で有名な「邯鄲」から大名や濮陽への食糧輸送を命ぜられて遠く南下して黄河の近くまで行きました。そこは平凡な農村でしたが部

落の外に大きい池があり、兵隊さんたちは釣りに興じてのんびり生活をしていました。

私はそこへ輸送途中、敵の襲撃にあり、辛じてたどりついたのになァンだと思いました。そこで二、三日滞在していたある日の事、池辺に古い石碑があるのを発見、これをよく調べて見ると昔の黄河の上陸地点であることが判読出来ました。昔は黄河がこの付近を流れていたのが何時の間にか遠くへ河床が変わってしまったのです。遠い昔、日本から安倍仲麿が遣唐使として時の都、洛陽へ使いた時もこの地へ上陸し、ここから陸路、馬やかごで遠く洛陽の地まで行ったであろうことを考えて感無量でありました。

もつとも私は大東亜戦争中の昭和十九年夏、爆撃行につれて行かれたことがありました。

その時、緑の古都洛陽が黒煙に包まれて燃え上がるのを上空から見たことがあるだけに特に印象深く思い出されます。

(四)ある少年航空兵の最期

大東亜戦争の中頃昭和十八年夏、私は応召して航空隊に入りました。勤務先は初めフィリピンの第十八飛行戦隊（隼戦闘機隊）でしたが、まもなく爆撃隊に転属しました。その頃その部隊には十七、八歳の少年航空兵がたくさん居り、彼らは何時も飛行機の操縦桿を握っていました。その中に安藤という紅顔の兵長が居り、何時も私を「おじさん、おじさん」と呼び、親しくしていました。ある時はウイスキーやチョコレートなどの航空食糧を持って来て食べきれないといって私の部屋で共に食べたり、あどけない無邪気な振る舞いをしたりしてにぎやかにはしゃいでいました。

私は終戦の昭和二十年正月、命令によりまたまた転属して特攻隊を編成する飛行部隊へ移ることになり同兵長とも別れました。

三月ごろだったでしょうか、そのころは沖縄の攻防をめぐって日米死闘をくりかえしていた最中です。ある日、私が飛行場の一隅で離着陸する飛行機を眺めていると、その中の一機が私の目前で止まり、その中から盛んに手を振っている操縦士がいました。よく見ると、あの安藤兵長です。

私もその奇遇に驚き、また喜びました。その夜は別離以来の色々話をききましたが、同兵長は特攻隊員として私の居る部隊へ転属して来たものでした。

それから、また従前通りのつきあいが続きましたが、ある夜突然、緊張した面持ちでやって来て「いよいよお別れです。明日出発、途中九州の鹿屋へよってそこから沖縄へ突っ込みます」という。私も驚きましたが、また当然来るべき時が来たとも思いました。

続いて「おじさん、今晩はおじさんの部屋にとめて下さい。そうして僕の親父になったと思って最期の時の心構えを注意して下さい」と言われて私は言葉もなく感激しました。

その夜は私もお別れに二人コーヒを飲んで乾杯し、深夜まで語りました。そうして私の隣りの急造のベッドで安藤はすやすやと眠りにつきました。こんな子供らしいのが明日の事も考えず平気で眠っているのに私はどうしても眠る事が出来ませんでした。

夜が明けていよいよ出発です。安藤兵長は私に「では行って来ます。形見にこのマフラーを置いて行きますから僕と使って下さい。それから見送りはいりません。もしそのために失敗すると男の恥です

から。私が空からお別れのあいさつに來ますから窓辺で見て居って下さい」といって軽い靴音を残し出て行きました。

やがてゴーゴーたる爆音と共に飛行機は離陸しました。上空で編隊を組む前に一機だけ突然離脱して私の居る兵舎の上空に來て屋根瓦も飛ぶ程の低空で飛び、大きく翼をふってから編隊を追及して白雲の中へ消えて行きました。数日後の情報で、その部隊は「全機沖縄で敵艦に突入して一機も帰還せず」との通知に接しました。

私はそれまでにたくさんの特攻隊員の見送りをしましたが、この時ほど後々まで脳裡に残っている兵隊はありません。この安藤兵長は東京都の出身で父は中将であつた事があとで分かりました。

私は近ごろ、白いマフラーをほこらしげに首に巻きつけて自動車やオートバイをカッコイイ姿でとばしている若人のレーサーを見る度に、不思議にこの純真むくな安藤兵長の姿を思い出します。同じ年ごろの若人でありながら昔は国のために淡々と命を捨て、四十余年後の今の若人は、その日その日の享樂にスリルを味わっている。それがはたして本当に幸せであらうか、と思うのは新旧の思想の相違からでしょうか。

寒さこらえ裸体渡河

——濁水、飢え、赤痢に悩む——

黄河決壊

第八中隊第二小隊の分隊長（伍長）だつた阿山郡伊賀町新堂出身、兼武治さん（故人）の陣中日記をみ

ると、「水攻め」の苦勞が次のように記されている。

六月十三日曇り（黄河決壊の日）朝三時半起床。班長ら地形偵察に出動、自分は展望哨勤務。刻々、湿地化する。夕方限りなく続く砂丘に一人歩哨に立つ。たそがれて夕月美し。いささかセンチになる。

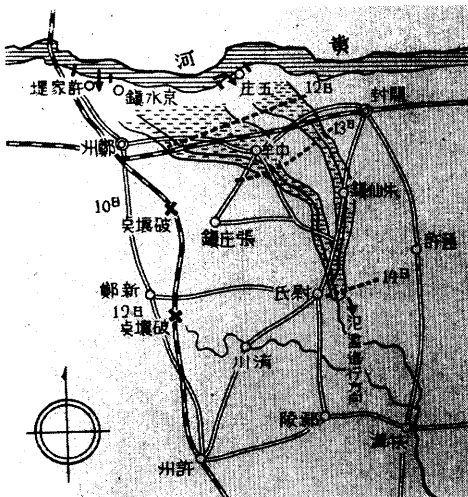
同十四日 下土哨に目覚む、眠し、初夏のことながら夜は寒し、下痢、腹痛。午前四時出発準備、大黄河堤防を敵決壊の報。刻々と増水。同九時、出発取りやめ、正午出発に変更、午後六時、大平塞（たいへいさい）着、かなり大きな城壁だ。水ガメでふろをつくる。

同十五日 糧まっなく徴発。水中を観泉塞部落へ。モモ、野菜たくさんあり、歓声あぐ。疲勞はなはだし。

同十六日 尉氏東方へ移動命令、九時出発。湿地にて行軍困難、夜行軍となる。尉氏東方三里にて宿営、下痢、腹痛。夜は雨。

同十七日 腹痛ひどし。観音さん命日なり、懸命に念ず。尉氏東方の橋梁破壊され前進不能。曇りのち雨。一日駐屯、眠る。

同十八日 ダ馬監視、六時出発。食糧欠乏、敵は騎兵五千をもってわが後退を追撃、しゃ断の挙に出づとの報あり。わが爆撃機盛んにとぶ。心強し。敵のさん壕、トーチカ、



黄河決壊地点図

えんがい銃座破壊のため出動、夜十一時營舎に帰る。道暗く敵銃声しきり。

同十九日 激しい敵の銃声で目覚む。雨。気分悪し。出動準備すれど取りやめ。飛行機にて乾パン、粉みを投下さる、ありがたし。徴発にてダンゴ汁を作る。減食にて空腹たえがたし。二十三日まで駐屯し、警戒。

同二十四日 午前二時半起床。敵攻撃のため前進。六時砲撃開始、焼けつく太陽。人馬の死体腐りまったくくさし。追撃戦となり花張にはいる、汁ダンゴ作る。疲労はなはだし。銃前哨に立つ。連隊砲戦死一、同郷の戦友平島伍長を案ず。十一時夜行軍にて引き返す。

同二十五日 尉氏東方一里に進出、大湿地にて四里ほどウ回前進、ハエ多く困る。

同二十六日 午前六時出発準備、渡河鉄舟にて前進、雨。師団の渡河完了。わが中隊部落に宿営、大きな棺おけあり。黒塗りで「寿」と書かれてあり、おもしろし。銃声あり。カボチャのつる、サツマイモの種イモ掘りて食う。

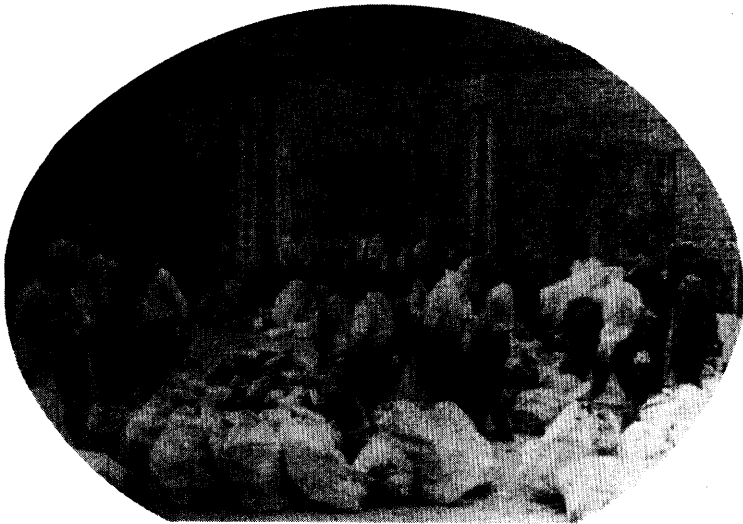
同二十九日 西方部落に敵陣地構築あるを遠望。七月三日まで敵と対陣、迫撃砲弾落下。夜はノミ、カ、昼はハエに悩まされる。

七月五日 通許（つうきよ）に向かう。一時半大水浸し地にはいる。三時まで胸までつかりながら裸体行軍。工兵渡河部隊増援され、モーター鉄舟にて四十人が一度に渡る。夜三時、裸体渡河、時折首までつかる。寒し、ふるえ上る。（同月十二日寧陵に着くまで連日行軍）

濁水、飢え、赤痢、そして追尾してくる敵と戦いながら、やっと六月二十六日未明から工兵隊の折りたたみ式鉄舟で渡河、午前十一時最後尾が渡り終わり、師団の渡河は完了した。しかし後方にはなお数本の川と幅広い湿地帯があり、ここでも追尾の敵と千二、三百呎の大河をはさんで十日間対陣。やっと七月五日から、師団の後衛となつて行動を開始、六日夜から七日未明にかけて水攻めから脱出したのであった。

避難行動を開始してから実に二十三日ぶり、通許付近で酒、たばこ、菓子を支給され、将兵はひとごちついた。

翌日からふたたび行軍を開始、十二日主力（二、三大隊）は寧陵に、第一大隊は帰徳に到着、休養をかねてしばらく駐屯することになった。このころ内地から補充の初年兵が到着、各中隊に配置されたので、徐州会戦で減った兵力はふたたび充足された。尉問袋も届き、将兵をよろこばせた。武漢攻略作戦は進んでおり、



寧陵の連隊本部前で内地からの慰問袋に喜ぶ

連隊の集結もその準備行事の一つだったが、将兵は知る由もなかった。

第八章 武漢攻略戦

武漢攻略戦への概観

徐州会戦は武漢攻略への一大前衛戦であった。将兵の合いことばも「漢口へ！武漢三鎮へ！」だった。いわゆる武漢三鎮は漢口（ハンカオ）漢陽、武昌の三都の総称で華中を貫流する揚子江の一千キロ上流に位置するこの三大都市は、揚子江、漢水を隔てて相對し、一体をなしていた。揚子江を通じて上流四川の宝庫と下流の上海を結ぶ要衝で、京漢線によって北の北京（ペキン）を結び、粵漢（えっかん）線で南の広東（カントン）香港（ホンコン）に通じる中国大陸の心臓部である。事変前の人口は百万、そのころには華北、華中から逃げ込んだ人間で事変前の数倍にもふくれ上がっていた。

蒋介石は、首都南京が陥落するころには、いち早く奥地の四川省重慶に臨時首都を設けていたが、行政院の外交、財政、内政の三部は漢口に、交通部は長沙に移しており、事実上の中心はやはり武漢であった。したがって蒋介石は「保衛大武漢」のスローガンを掲げ、揚子江の南北にわたって広大な防衛陣地を構え、日本軍の進撃を食いとめようと数十万の大軍を配していたのはもちろんである。

この要衝の争奪に日支の和平も又あると考えたのである。

日支両国の首脳陣が、支那事変の全期間を通じて、もつとも和平か抗戦かの岐路に悩み、その有利な和

平条件を獲得するために苦慮した時期であり、又そのための戦いでもあった。それに伴う経過を以下たどってみたい。

大本営では南京攻略後から漢口攻略作戦と補給路遮断のため広東攻略作戦を研究していたが、昭和十三年初頭の戦線不拡大方針により、その研究は中止の状態となっていた。徐州作戦実施決定に伴い、大本営陸軍部は漢口攻略作戦への転移を予期して、これが研究を進めるとともに徐州会戦もその意図のもとに作戦の指導も行われていたのである。

大本営陸軍部内では、漢口作戦実施に関連して漢口攻略と広東攻略を同時に実施し、この事変の一挙終結を図っていたのである。参謀本部は昭和十三年二月、戦線不拡大方針に基づく在支兵力を次のごとく半減する計画であったことは事実である。

▽中支方面、第九、第十一、第一百一師団を帰還させ、第三、第十三、第十八師団および、台湾混成旅団を配置し、新設師団を必要に応じて位置させる。

▽北支方面、第十六、第二十師団を帰還させ、第五師団は北支に、第百九師団は七月に復帰を予定されていた。

だが漢口作戦遂行のためにこれらの内地帰還計画を中止するほか約四十万人の兵力と新設兵团に約二十万人を必要とし、作戦の軍需は三十二億五千万円と見積もられたのである。

それであるのになぜ大本営がこの重大な作戦遂行を決定したのか。

前述のように支那国民党政権内においても和平気運の高揚は激しいものがあり、我方も今次戦をもって

戦争終結にしようとしたものであった。その決断の基礎となった情勢判断は次のようであつた。

一、支那事変を早く解決したいというのは陸軍省部一
致の空氣となつていた。

二、漢口、広東を攻略すれば、歴史的觀察においても
中国を支配しようというのが第二部（情報）の意見で、
この作戰により、武力をもつて支那事変解決の大半を達
しうるのであらうと考えられ、海軍も中原を制すれば実質
的に中国を支配しようとする熱心に主張した。

三、重慶を爆撃するためにも、武漢周辺を占領する必
要が感じられていた。当時、国民政府機関の大部分は重
慶に後退していた。

四、漢口、広東攻略までなら、陸軍主力を投入すれば、
現在の兵力で作戰可能である。

五、ソ連はこの際、参戦はしないと判断された。

六、ただし、武漢と広東攻略に政治謀略を加えて蔣政
権を屈服させうるかどうかには自信がなかった。

大陸命第二百一號

命令

一 大本營ハ漢口攻路ト相前後シテ南支那
於ケル敵ノ重要ナル策源ヲ奪ヒ其主要ナル對
外連絡補給路ヲ遮斷スルヲ廣東附近要
地ノ占據ヲ企圖ス
二 第二十一軍司令官ハ海軍ト協同シテ廣東
附近ノ要地ヲ攻路スヘシ
廣東攻路後ノ占據地域關シテハ別令ス
三 臺灣軍司令官ハ第二十一軍ノ失站ニ關シテ接

助スヘシ

四 細項ニ關シテハ參謀總長ヲシテ指示セシム
昭和十二年九月十九日

奉勅傳宣

參謀總長載仁親王

✓ 第二十一軍司令官 古莊幹郎殿
✓ 臺灣軍司令官 古莊幹郎殿
✓ 官 門下 中 中 中

海軍は漢口への遡（そ）江作戰に積極的意欲をもっており、広東作戰はもちろん、海南島攻略の意欲があった。

こうして、昭和十三年六月十五日の御前會議によって漢口攻略作戰実施が決定された。

北京に「臨時政府」

——南京には「維新政府」成立——

漢口攻略実施を決定したとき、占領地域の南北両政權はどのような状況であったか。

南京陥落後の昭和十二年十二月十四日、王克敏を中心とする中華民國臨時政府が北京に成立した。その後北支の各地治安維持会は逐次臨時政府の治下に入り、冀東防共自治政府も昭和十三年二月一日合流して、昭和十三年四月二十日には河南省、山西省が成立し、臨時政府は河北省、山東省、山西省、河南省北部をその治下とした。

中支方面においては、戦禍のため治安の回復が遅れていた南京、上海方面において昭和十三年一月下旬、大小二十六個所の治安維持会が結成され、新政權樹立の気運が高まった。昭和十三年三月二十八日、南京に「中華民國維新政府」が成立し、行政院長に梁鴻志、法制院長に溫宗堯が就任した。そして、その成立宣言において維新政府は地方政權であり、将来は北京の臨時政府に合併するものであると、その性格を明らかにした。

日本政府は七月十五日、「支那中央政府樹立指導方策」を決定するが、これらについては後述する。

武漢攻略を決定した直後、あたかもこの機に合するごとく、臨時政府の両政府当局は蒋介石に対し反省を促す通電を発することとなり、六月十八日、次のごとき声明を蒋介石をはじめ、広東、香港、福州、重慶等の省、市主席あてに発した。また、蔣政権の指導下にある一般民衆にも知らせたのである。

臨時政府宣言要旨

一、国民党の長期抗戦焦土政策は、国家を破壊し滅亡に導き、なんら国利民福を図らず、いたずらに自国民衆をして窮乏のドン底に陥れるものである。

一、今回の黄河堤防の決壊はもちろん、北支各地における無益の抗戦は自暴自棄政策の現れで、かくのごとくであれば、党政府は国民大衆とともに壊滅にひんするものである。

一、国民政府は長江をもつて防御しようとしているが、同政府の大言壮語にかかわらず、要地は日々陥落し、同政府の壊滅はすでに時間の問題である。ここにおいて国民党政府は、よろしく速やかに大勢を達観して敗勢を認め、時局の平和的收拾を図るべきである。大勢を見ずして継戦すれば万事休すであろう。

一、臨時政府は、成立以来日はまだ浅く半年に至らないのに、財政収入はもちろん、全般にわたり基礎強固となり、人心安定し、北支の復興はますます進捗しつつある。この際、党軍内の真に国を憂うる各將領はもちろん、北方諸將諸氏もその理をわきまえ、ともに明朗北支の再建に協力すべきであり、我が臨時政府としては一視同仁なら拒むところなく、ともにひとしく同胞として新中国の復興にまい進するものである。

維新政府通電要旨

国民政府は昨年、同文同種の隣人たる日本と戦火を交えるに至ったが、戦禍は今なお南北十数省に及び、人民をいたずらに窮地に陥れる惨をあえてした。これは中国に有史以来かつてないところであり、わが維新政府及び臨時政府はいずれもその成立宣言において、その罪の許すべからざることを挙げたが、国民政府はその迷夢よりいまだ覚めず、抗戦を叫び政権を固守し、ソ連政策をもっていたずらにその勢力強化を図りつつあり、あまつさえ金融を乱し、私産を封鎖していたずらに人民の負担を重くしてある。宋靄齡、宋美齡らが市場の交易を操縦し、航空公款を己のほしいまに犯していることも行路の人の熟知しているところで、すべては蔣及び宋家が自家の利を図らんとするためのものにほかならない。最近においては、徐州を守ることができず、安慶も落ち、武漢湘粵もまた危地におちいるに至った。蔣介石は禍心を抱くあまり黄河を決壊させ、数十万人の人民の生命を奪うような暴挙をあえてしたが、その心は実に計るべからざるものがある。わが維新政府は成立以来秩序の回復を図り、農村を安定し、商業の復興を図りつつあるが、災区があまりに広いため、いまだ十分にその目的を達せずとはいえ、政府は最大の決心をもって、同胞に楽業安居させるよう努力まい進しているものである。政府治下の民衆は一心同体となり、国を誤る蔣政権を討ち、国軍を安定させ、家族の安全を期すため蔣政権下に盲従すべきではない。

蔣、和平の調停依頼

—— ルーズベルト、抗戦を継続させる ——

和平の機運が熟し、自他ともに最高潮である敵陣営にあって、汪兆銘一派の必死の活躍は面目躍如たる

ものがあるが、これは別稿にしたい。

本項の冒頭にのべた支那事変は何で起こったかを顧みると、それは満州事変が起因である。その満州事変は何で起こったかについての詳述は別稿「現代史外聞」に記してあるので参照願いたい。

ここではその要約として武漢攻略戦における蒋介石国民政府軍が運命を賭けていた大別山の戦闘について、郷土部隊の方々に語っていただいた真実をもとに紹介したい。

敵の首都南京の死命を制した紫金山攻略と光華門の一番乗りは、その世界戦史に燦（さん）として輝く武勲である。そして後世長く世人の注目する戦記であることは偽らざるところであろう。そしていま蒋介石国民政府軍がここを先途とする大別山の戦闘で、和平か抗戦かの決を採ると満を持した堅陣に突入したのが、これまたわが郷土部隊なのである。その勇戦、力闘、奮戦の跡を現場に立った勇者に語りつくすことは本項に錦花を添えることになり、感激にたえない。

さてこれに先立ち米国が駐支ドイツ大使トラウトマンを介して対蔣和平工作を行っていたことは、南京戦終結のときに述べたが、ルーズベルトはそれを知っていた。

すなわち南京占領後の和平会議を進めている最中、蒋介石はルーズベルトに十二月十四日付で次のような親電を送っている。

「あくまで抗日戦は続ける。しかし米国の有効な援助とできるだけ早期に成功裏の結末をつけてくれることを緊急に願う」それに対してルーズベルトは翌年一月十一日付、米中是不離一体の立場にあることを強調したうえで問題解決の手段は現在極力考究中であるが、それは極めて有効であると返電している。

なお蔣介石は一月三十日付の親電にも非常な感謝を長々とのべたのち、最後にくりかえし日本の攻撃を阻止し、米中両国の断固たる理想の実現に米国が全力をあげてくれること、そして「すべては大統領の胸裏にある最終決定に手段をおまかせする」とある。ルーズベルトの胸中にあるものが何であるかは、もはや言うまでもないことである。そして「一年以内に屈服」させる予定の日本は、屈服するどころか、一年たった昭和十三年十月八日には漢口に迫ってきたのである。「一年」という約束があったかどうかは分からないが、この時点になると、さすがの蔣介石もたまたまなくなったのであろう。日本側からもたびたび平和の手がさしのべられていることをルーズベルトに告げたらうえ、あからさまに対日和平の調停を依頼している。（十月八日付の蔣介石親電を受けとったルーズベルトは、あきらかに日支間の調停をのぞまず、正面からの返答を回避しつつ逆に抗戦を示唆している）

ルーズベルトは武力によらぬ解決法が日々有効に展開しつつあることを強調し、抗戦を継続させたのである。武力によらぬ解決法がA B C D対日包囲陣の強化であることはいうまでもない。

同時に事件発生以来、支那共産党が事変拡大に狂奔し、とくにこのころ蔣政府を抗戦へと突きあげていたことは、注目すべきである。

そしてさらに一年たった昭和十四年九月一日にも、蔣介石は同様な依頼をルーズベルトあてに送っている。その内容は、「ルーズベルト大統領に日支間の調停をやってほしい。しかし、この提案が蔣介石からなされたことは知られたくない。あくまで米国側のイニシアチブでやってほしい。日本が汪兆銘政権を擁立する前に行動をとる必要がある」というものであったが、その希望は容れられなかった。

このように自他とも和平の端緒をつかもうと真剣に模索していたのであったが故に、有利な和平条件を、との戦いはより激烈をきわめたのである。

第九章 悪戦苦闘の大別山

第十六師団の行動概観

それではかの大別山の苦闘を以下で綴ろう。その大別山の死闘はわが郷土部隊が戦った支那事変と称する作戦の中で、首都南京城攻略戦の紫金山奪取戦に勝るとも劣らぬ苦闘であり、激しい戦いであった。

その前に大別山突破作戦で第二軍に属していたわが第十六師団の行動を概観することによって郷土部隊の勇戦力闘の様相がより克明に描かれ理解されるところと考えられるのでそれを追うことにする。

昭和十三年九月九日、軍は葉家集方面に前進中の第十六師団に対し、その主力の到着に伴い、葉家集—方家集—商城道（含む）北側地区を商城方面に突進し、敵主力の退路を遮断すべし、と命じ、これに瀨谷支隊等を配属した。

第十六師団は十二日攻撃前進を開始し、戦闘の進展している第十三師団とともに、敵を撃破して追撃を続け、十六日商城を攻略した。第十三師団もまた同地付近に到着した。

光城—商城の線に到着した各師団は直ちに一部を先遣してその後の作戦を容易にした。即ち九月十七日

第十師団は岡田支隊（歩兵四大隊基幹）を、第十六師団は篠原少将の指揮する部隊（歩兵三大隊基幹）を、また翌十八日第十三師団は沼田支隊（歩兵六大隊基幹）をそれぞれ進発させ、二十一日岡田支隊はいちはやく羅山を占領、篠原少将の指揮する第十六師団先遣隊は沙窩（さか）付近に、また沼田支隊は新店北方地区に進出した。

こうして第一線兵団の光城―商城の線に到着の機が迫ると十五日、軍は第十三、第十六師団をもって速やかに大別山系を突破し、武漢平原に進出して、広済方面にある敵の退路を遮断することに決し、第十六師団は宋埠方向に、第十三師団は白昂方面に向かう前進をそれぞれ準備すべきことを命じ、十九日さらに二十二日以降随時進発するよう命を下したのである。また第十師団、第三師団は信陽方面の敵を撃滅しつつ、速やかに漢口西北方に進出し、武漢平地を制圧すべしであった。

ところが九月十九日から霖雨になってその二十二日も降りやまず路床は柔軟、泥濘はなはだしく、車両の通行は全く途絶えて各師団の補給の円滑を欠き、道路を補修する工兵隊の必死の努力にかかわらず、主力の進発時期を延ばさざるを得なくなった。

九月二十日、第十六師団先遣部隊は沙窩南方地区に進出したが、敵の抵抗は頑強で著しい進展を見ることが出来なかった。そのうえ二十五日以来新たな敵が沙窩北方地区に現れ、先遣部隊を背後から攻撃してくるだけでなく、補給路である商城―沙窩道をおびやかした。そこで天候が回復し、補給の目途がついたのを機に二十七日、師団は主力をもって商城付近を進発して、まずこの敵を撃破した。

第十六師団は主力の到着とともに沙窩南方大別山系の敵に対する攻撃を準備し、十月六日から攻略を開

始した。十五日から総攻撃を再開、同日大円山を、十七日には西山、大別富士、および六日以来攻撃を継続していた戦場の最高点磨盤山南側高地を奪取、戦況が進展したのを機に師団は左側方面から敵の側背をつかせ、二十一日犀牛望月高地を、また二十三日には打鼓寨、白雲山をそれぞれ占領し、いっきよ追撃を敢行、二十四日小界嶺で省境を越え、二十五日麻城、二十六日宋埠に、また二十七日黄安に達した。

その後軍は、第十六師団方面の戦況が進展したことによって、後方警備に任じてあった歩兵第十九旅団司令部および歩兵第二十連隊主力を二十一日、原所屬に復歸させ、二十四日第十六師団は主力をもつて河口鎮方面に追撃するためそれぞれ部署についた。

十月中旬における第十六師団の戦力は、第一線歩兵中隊で消耗が最もはなはだしく、歩兵第三十三連隊のごときは中隊長以下十三名にすぎない中隊があった。

九月二十一日、第十三師団沼田支隊は新店北方地区に進出したが頑強な敵の抵抗にあつて戦況は進展しなかった。師団主力は二十九日商城南方地区から進発し、十月初旬攻撃を開始して逐次進撃、七日、八日の間杯山、一文字高地、天王山から人形山、松山高地を相ついで奪取、さらに進んで新店を占領した。

また左側方面から回した部隊は八日長福店東方に進出し、十一日右翼方面で雀尖山を奪取したがその後あまり進展をみないまま中旬末に至った。十九日左側方面汪家薬舗東方高地に進出し、二十一日獅子腦および將軍寨一帯の高地を完全に占領し、戦況は著しく進展、二十三日より各方面から逐次豫鄂省境を突破、敵を撃破しつつ二十六日麻城東方地区に進出、ついで主力は宋埠に至った。

これより先十月二十四日、軍は第十三師団の主力で黄坡北方地区に追撃に向かい、さらに二十七日一部

は孝感付近京漢線に向かって突進させ、主力をもって宋埠付近を根拠とし、白杲方面の敗敵を撃滅するため、また第十六師団の一部を黄安付近を根拠として礼山および宣化店付近の敗敵を撃滅するため、それぞれ所要の部署についた。

水不足に悩む将兵

——一粒のウメ干しを数人が——

武漢攻略へ

商城（しょうじょう）を警備中のもようを和田岸雄さん（死去）『津市雲出本郷町出身』は生前次のように語っていた。



見事な商城の城門

十三年六月まで久居の屯営に残っていた和田さんは補充で内地を出発した。青島へ上陸、済南を経て本隊を追及、徐州戦のすんだあとへ第二中隊の小隊長（少尉）で着任した。本隊に編入されたのは商城の手前だったと記憶している。そのころ華中には抗日の空気がみなぎっていた。中国は井戸が少なく、百ないし二百戸の部落に一つか二つしか掘っていない。それが日本軍の進出を知って全部埋めてあり、行軍中の将兵は水不足に悩まされ

た。死体の浮いたクリークの水を飲まざるを得なかった。ウメ干しが配給されると一粒を数人でなめ合い、五ツほどのタバコの吸いガラも拾って吸った。

商城は大別山脈をぬう麻城街道にある、かなり大きな町である。街道は沙窩―麻城を経て漢口に通じていた。ここで和田少尉は約五十日間警備の任務についた。本隊は町の中に本部を置いており、軽機二丁をもらった和田小隊（総数八、九十人）は鉄橋警備に出された。ガード下に露営することになった和田小隊は夜間の敵襲に備え、あらかじめ標程設備をした。どの地点に敵影を見たら距離何十、何百で射撃すればよい、と目標を決めておくことだ。案の上、二、三回襲撃を受けた。歩哨が「ニイ（シナ兵）だッ」と叫ぶ。感づかれた敵は小銃を乱射した。鉄橋に当たって、火花と金属音とともにほじく銃弾、花火のように美しくさえ見える。

バリバリ

と軽機が応射する。ヤミ夜のことだから当たらない。もちろん味方も損害はゼロだった。敵はそれでも襲撃のたびに電話線を切断し、反戦ビラをまいて逃走して行った。

ビラには「親愛ナル日本兵諸君、妻子待ツ内地へ帰レ」といった文句が書いてあった。和田小隊長はビラを見る部下の顔を見渡したが、どの兵も「またまいて来やがった」「チリ紙の代わりになるぞ」といったて元氣、動揺は見られなかった。戦場での部下は頼もしく時には神々（こうこう）しくさえ見えるものだ。部下の掌握は上官の大きなつとめだが、夜間になると兵士たちは必ずかたまり合った。上官としてこれほどうれしい気持ちにはなかった。警備中に、男装の中国女を捕らえたことがあった。カントン生まれの女学校

出であった。スパイであったかどうか、本隊へ送ったので知る由もなかった。

このあと和田さんは持病が出て上海病院を経て内地へ帰った。九年の入隊でチチハル駐在にも参加、黒竜江付近の討伐経験もある。本職が教員で、愛知一中、神戸中など教壇に立っており、戦争末期に再び召集、内地にいた。伊勢市が空襲されたところは神宮警備隊長で同市桜木町にいた。戦後は市会議員、農協監事もした。

大別山系を横断せよ

——士気盛ん、第十六師団が出発——

連隊の属する第十六師団が命じられた任務は「大別山系を横断せよ」であった。

第二機関銃中隊長であり、その後連隊副官（大尉）となった島田勝巳さん（死去）Ⅱ「歩兵第三十三連隊史」の著者Ⅱは、そのときの状況を生前次のように語っていた。

首都南京が陥落しても平和が回復しそうにないと分かったとき、大本営の企図が、次は武漢三鎮攻略であり、重慶であろうことは第一線將兵にも想像された。蒋介石は、重慶に落ちつくためには時間を稼ぎたかった。それには武漢三鎮で日本軍を食い止めることが必要だ。ではデルタ地帯の武漢をどうやって防御するか。それはけわしい大別山系で迎え撃つ以外にない。

彼らは同山系に強固なコンクリート製（ペトン製）の永久陣地を築いた。かなり以前から企図していたらしく、コケむした陣地があった。われわれはこの陣地をめぐる一ヵ月間にわたる攻防、死闘をよぎな

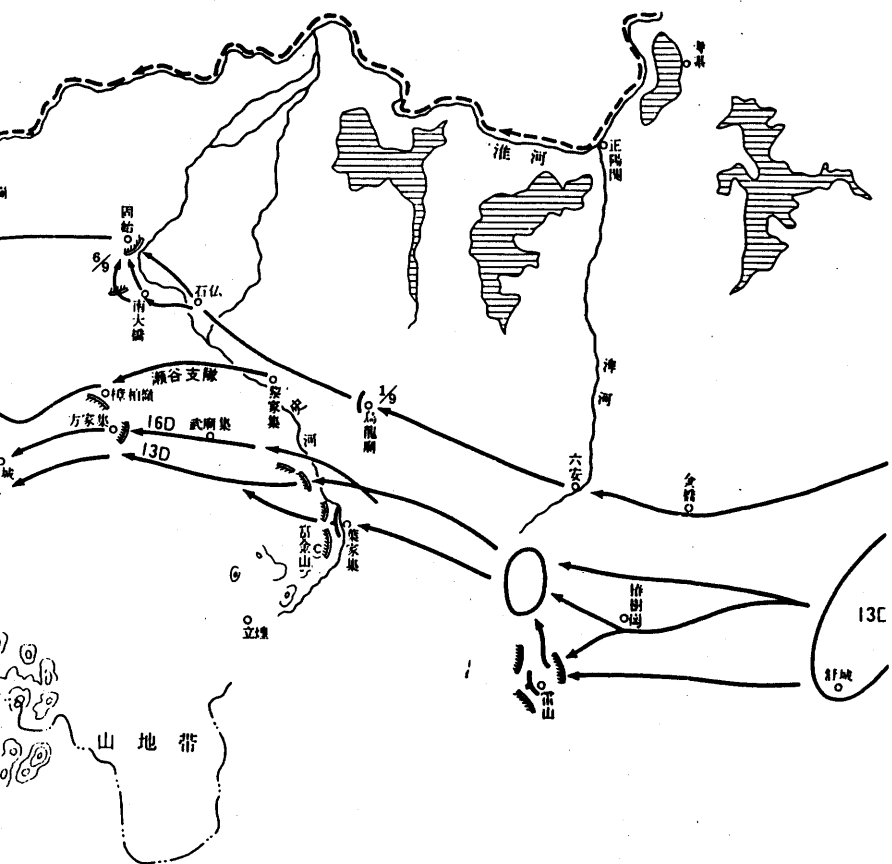
くされた。蔣介石はその一ヵ月間という時間が稼げたわけだった。

重慶攻略という日本軍の企図はやがて大陸―南方を陸路で結ぶ「大陸打通作戦」に発展していった。(島田さんは上海陸軍部報道部長で同作戦に従事した)武漢攻略に投入された第三、第十三師団などは最初から最後まで大陸で活躍し、重慶側に鳴り響いた師団であり、またわが第十六師団は南京攻略で勇名をはせた野戦部隊である。これら日本軍のよりすぐった精鋭が武漢へなぐり込んだのであった。

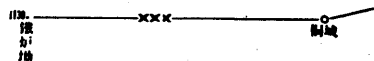
第二軍は、第十六師団が水攻めにあい、第十師団がこの救援に待機したため、作戦開始が一ヵ月も遅れ、八月中、下旬に廬州に集結した。軍司令官東久邇中将は、そこから兵力を二つに分け、第三、第十師団(甲軍)は大別山の北方をウ回し、固始光州を経て京漢線の信陽から直角に漢口めざして南下させ、一方第十六、第十三師団(乙軍)は大別山を横断し、麻城を経て西進、漢口へ突入させることにした。



戦陣での飯盒すいさん風景



山 地 帶



第九章 悪戦苦闘の大別山



大別山の天險を計算した蒋介石は、はじめ孫連仲を総指揮官とする四川省、湖南省、干学、忠軍などの地方軍を配していた。だが、精銳をよりすぐった日本軍の猛撃はすさまじく、しかも地方軍は所詮地方軍でしかなかった。容易ならぬ戦勢にあわて、十月から直系師団三個師、地方軍五個師を急増加し、さらにその数日後には直系軍六師団および、とっておきの戦車、砲兵部隊をくりだした。こうした闘志、武装ともすぐれた敵を、しかも最も不利な地形を相手に戦ったのがわが第十六師団であり、第十三師団であった。悪戦苦闘の末、やっと麻城をぬいたときには、すでに第六師団（第十一軍）が漢口の東近郊に突入していた。はなやかな南京攻略に比べ第十六師団の武漢攻略は、ただ「死闘」の連続に終始したといえよう。郷土の将兵も、大別山の戦闘でほんとうの血みどろの「戦争」を思い知らされたのであった。

大別山

西は湖北省から東は河南省および安徽省に至る、華中の大山系である。沙窩（しゃか）を中心とした大別山は、標高五、六百呎、ほとんど草木と岩石の山が折り重なっている。中でも最高峰の磨盤山をはじめ頭山、揚家寨（ようかさい）などの山々は、その斜面が切りたつたようなけわしさだ。こうした自然の要害のうえに、トーチカや城さい（石垣）で固めていたことは述べたとおり。

しかし、もとより将兵がそんな敵情を知る由もなかった。幹部さえも、詳細な地図もなく、はじめは敵がどんな防御線を張っているのかわからなかった。（こんどの敵は手ごわいらしいぞ）と思いつながら「たかがシナ兵、全滅させてくれる」と士気は盛んなもので、三日分の食糧と弾薬を手渡され、出発したものであった。

沙窩方面向け前進

——各部隊、次々と敵陣を占領——

余家集付近の戦闘

昭和十三年九月十八日から十月二十三日までの戦いは「大別山脈沙窩付近の戦闘」と統一して呼ばれている。だが、便宜上將兵はおもな戦闘ごとに区切って適当な呼び方をした。

師団本隊として九月十六日夜、商城にはいり、同地西側地区に兵力を集結した連隊は、十七日未明篠原旅団長から次の命令を受けた。「旅団ハ先遣隊トナリ、速ヤカニ商城―胡家祠―余家集―沙窩―麻城道上大別山ノ要衝ヲ占領シ、師団コンゴノ戦闘ヲ容易ナラシメントス」

連隊は旅団長の指揮下（直轄）に入り、前進することになった。さらに旅団長は「第二大隊（連隊砲一小隊ほか野砲、工兵、戦車など配属）ハ、ナルベク速ヤカニ現在地出発、沙窩付近ニ前進シ、同地付近ヲ占領シ、先遣隊主力ノ同地進出ヲ容易ナラシムベシ」と命じた。山田連隊長は直ちに電話で第二大隊（三浦俊雄少佐）に通報した。

第二大隊は旅団先遣隊として同日正午ごろ沙窩方面向け前進を開始した。この日朝からの雨は正午ごろからしだいに激しくなった。橋は敵によって落とされ、道路は雨でぬかるみと化し、軍靴がめり込むというひどい行軍だ。道端には廃屋に等しい民家が点在する。山の斜面に植えつけられたサツマイモはもう収穫期だろう。山頂は濃霧の中にあった。

配属工兵の活躍で前進は続く。戦車三台（一小隊）を先導に、第六中隊（辻四五郎大尉）は楔入（きつにゅう）部隊としてどんどん進む。同隊の任務は、文字通り敵陣深く入りこみ、「クサビ」を打ち込み、敵をおびやかすことだ。時おり遠くから撃ってくる敵弾が戦車にあたり、カーンと軽い金属音をはねかえしてくる。戦車のかげを前進する兵士たちにとってその音が頼もしい。楔入部隊の少し後方を進んでいた第五中隊の一小隊が午後三時ごろ双家口（そうかこう）前方で敵の抵抗を受けたが、まもなく突破、余家集前方で露営した。余家集は沙窩の前衛陣地。城壁とその前方および両側山岳地には少なくとも五、六百の敵がいる。そびえたつ頭山を左に見て、十八日午前一時十分、道路をはさんで左第一線に第七中隊、中第一線に第八中隊、右第一線に第六中隊がそれぞれ機関銃一個小隊を配属され、また八、六両中隊の間に第五中隊の一個小隊、その少し右後方に大隊砲が展開（第五中隊の二個小隊が予備）連隊砲一個小隊と配属の野砲第五中隊が本道上に陣取り、余家集前方五百呎の山岳地帯を占領した。

一方、第三大隊、第一大隊の第二、第三中隊を主力に、師団工兵、通信隊など配属された本隊は、第一大隊（二個中隊欠）連隊砲一個小隊を前衛に十八日午前五時三十分商城を出発、同十一時十分、本隊の先頭は双家口、分水嶺の中間に達した。旅団長は午後零時三十分、第二中隊を左前衛として分水嶺、三人沖、四馬敦付近を経て夏家湾方面に進出させた。

その十分後、本隊もふたたび前進に移ったが、本隊の先頭が分水嶺西側地区に達したとき頭山方向から激しい射撃を浴びた。旅団長は本隊主力に攻撃を命令、連隊長は第三大隊（第十二中隊大行李護衛で欠）に頭山東北側りょう線から攻撃せよと命じた。前衛の一大隊は第二中隊を合わせ指揮し、同二時五十分攻

撃開始、同四時頭山最高峰を除く各高地を占領、このとき第三大隊は旅団長直轄となった。

また第三中隊（一小隊欠）と第四中隊は同二時二十分から頭山に攻撃中で野砲は突撃路を開くため余家集城を砲撃中だった。同夜十一時三十分、旅団長は明払曉攻撃を命じたが、敵は夜陰に乘じ、西南方面へ退却していった。

ダダダ…、火吐く重機

——八百発を一気にぶっ放す——

そのころのわが重機は九二式機関銃だった。弾丸は三十発が一連となっており、長方形の弾薬箱一個に十八連はいつていた。

「これを一度に一箱半（約八百発）ぶっ放したのが余家集（よかしゅう）の戦闘でした。普通の戦闘では、せいぜい二、三連です。わたしの戦闘経験中これが最高でしたよ」と語るのが第二機関銃第二分隊長（軍曹）だった川合宣一さん（六九）——久居市榊原町——である。中隊長は島田勝巳



高安城外を征く

大尉（故人）だった。

前夜来の雨は、きょうも濃霧のように山々をおおい、大別山の山脈もかすんでいる。ともすると雨で視界を遮られがちの将兵は、ずぶ濡れの軍服のそでで戦闘帽から目にしたたるしずくを拭い、あるいはすべての手を草葉で拭ってしっかりと銃を握り直し、敵陣の方角をにらみすぎる。

午前七時半、ズドン、ズドン

後方のわが砲兵陣地が戦場の静けさを破った。右第一線の五、六、八中隊は、余家集の前方五百呎の南北稜線に陣地を構える敵に肉薄を開始、砲兵の攻撃は天地も割れんばかりのすさまじさだった。敵チェコ銃座は跡かたもなく吹っ飛ぶ。すかさず「前進！」各中隊配属の機関銃小隊は、一目散に後方陣地へ逃げる敵兵をなぎ倒す。

一方左第一線の第七中隊は、チェコ機銃二丁を持つ約百人の敵と必死に交戦していた。同中隊に配属されていた機関銃一個小隊、一個分隊は歩兵に配置、川合軍曹の一個分隊十一人（馬一頭）は急拠左手の小山にかけあがり、松林に九二式重機を構えた。

タタタ……

百呎ほど前方のふもとから味方の軽機が中隊を援護している。川合分隊長の双眼鏡が左前方約七百呎に敵をとらえた。

「距離七百」

と川合分隊長。

「よし」

すばやく照準を終えた射手が元氣いっぱい答える。

「射て！」

ダダダ……

腹の底をゆさぶって重機が火を吐く。そのとき敵陣地からパッと変な物が吹つとぶ。双眼鏡をのぞき込むと、番ガサだ。敵兵はカサをさして応戦しているのだ。

「右二〇」

川合分隊長の指揮どおり、射手が撃ちまくる。

ジュジュジュッ！

焼けた銃身をたく雨がもうもうと湯気を巻き上げる。撃って撃って撃ちまくり、なんと一箱半、八百発を一気にぶっ放したのだ。痛快の一語に尽きる。

これで敵の反撃が絶えた。

「前進！」

兵士たちは無我夢中、敵陣に突っ込んだ。と、一兵の敵影もなかった壕から、突然ニョキニョキと敵兵が現れ、上



快い威力を発揮する92重機

半身を乗り出して手投げ弾を投げつけてきた。壕内深くかくれ、わが方の接近を待っていたのだ。

とっさに身を伏せたが、中谷軍曹以下三人が手投げ弾の破片で戦死、第七中隊長平井秋雄中尉、第九中隊土井俊一少尉、滝本伍長以下十一人の将兵が負傷した。だが果敢な突撃を続行、ついに日没のころには敵陣はわが軍の手に落ちた。

顕山および余家集付近の敵は、迫撃砲数門を持つ千五百で第六十一師、第八十八師の第一団、第三十師に属する者と推定、死者約百五十を残し、おもに西南方に退却した。

この日機関銃中隊は四千六百二十五発を撃ったのであった。(この項の数字等は戦闘詳報による)払暁攻撃を準備した連隊本部も拍子抜けのかたちだった。川合さんは昭和十年兵、このあとすぐの九月二十八日重傷を負い、兵役免除となった。

「顕山を占領せよ」

——太田中尉に命令下る——

余家集付近の戦闘

九月十八日、先遣隊本隊として前進していた第三大隊(上田孝少佐)は、午後一時四十分、連隊長から顕山(けんざん)東北側稜線から当面の敵を攻撃せよとの命を受けた。左第一線に第十中隊、右第一線に第九中隊がいずれも機関銃一個小隊を配属されて展開(第十一中隊予備、第十二中隊欠)さらに最左翼に第二中隊が配置され、同二時五十分攻撃を開始、同四時ごろには顕山の最高峰を除くほかの高地を占領、

ついで頭山南側地区を西南方に向かって戦果を拡大中、旅団長直轄となった。この戦闘のとき太田雄三さん(八七)―津市船頭町三三八一、P―一〇三一―は第九中隊長(中尉)だった。

進撃途中、連日雨でしかも露営中たびたびゲリラが出没、武器を盗まれることもあった。

この日、昼間の戦闘で第一小隊長土井俊一少尉が負傷、夕方、休む間もなく、「頭山を中隊で占領確保せよ」との旅団副官命令が出た。太田中尉は「むちゃな命令だ」と断ったが、再び伝令がきて「必ずやれ」との敵命を伝えた。

(やむを得ぬ)

太田中尉は機関銃一個小隊を配属してもらい夜襲を続行するハラを決めた。命令服従は絶対ではないと日ごろから確信していた。あの徐州会戦、隴海線追撃のときも夜襲せよとの旅団命令を「最前線の判断は中隊長にまかせろ」と蹴り、払暁攻



第一線の命令下達状況

撃をかけた。案の定、敵は城門近くに地雷を埋めており、旅団命令に従っていたら全員木っ葉みじんだった。第三機関銃の中隊長堤千里少尉（久居市新町）も「太田さん、命拾いをしましたわ」と胸をなでおろした。それ以降、いよいよ第一線の判断による攻撃に確信を持つようになっていた。

再三の命令に、やむなく夜襲することにし、まずハンゴウで腹ごしらえをした。敵はヤミの中にすっぱりその動きを包んでいる。

「ようし、敵さんが動くまでわが方もじっとしていよう。根比べだ」と待機を命じた。寒気はようしやなくハダを刺し、将兵は自然にからだを寄せ合う。午前零時まで待った。だが敵が動く気配がない。「ええい、もうがまんならぬ！」

機関銃小隊長の石田正一少尉がついにじれだし、

「中隊長殿、ひょっとしたら敵は退却してしまったのかも知れませんよ。一度撃ち込んでみましょうか。撃たして下さい！」

「……」

太田中尉はしばらく考えあぐねたが「よかろう」と命令した。前方のヤミの中へ乱射した。するとダダ……と激しい銃火がかえってきた。やっぱり敵はいた。わが方の夜襲を待ち構えているのだ。

「よし、敵に撃たせるだけ撃たせろ」

太田中尉の号令で兵士たちは再びくぼ地に伏せ沈黙する。敵はむちゃくちゃに撃ちまくってくる。ヤミをなめる敵機関銃の赤いシタ。下火になったのを見た太田中尉は「前進ッ」をかける。無言で突っこんでみ

ると、敵陣はすでもぬけのからだった。それでも、さっきの乱射がまぐれ当たりしたものらしく、数個の死体がころがっていた。頭山占領を旅団長に報告、占領地の確保を後続部隊にまかせ、さらに追撃前進に移った。

その翌日、前進途中、道路に面した一軒屋で休憩中「火をたくな」の命を下した部下がタキ火を始めたため火災を起こし、武器弾薬を焼失、二、三人がヤケドを負った。ぬれた軍服を乾かすために兵たちは丸はだか。

「失火で銃器を焼いたことは口外するな」といいふくめ、野戦病院から負傷者の武器、軍服を失敬して窮地を脱したが、やがてバレーで大隊長からしけられたものだった。こんなこともあって、そのまま沙窩付近に司令部を置いた旅団の警備についた。

このころ大別山方面のわが軍の戦況はすでにかんばしくなく、食糧、弾薬はかろうじて飛行機で投下されるものに頼っていた。将兵はダイコンやイモで飢えをしのいでいた。太田中隊が旅団警備を第八中隊に引きつぎ、大隊に復帰した日、旅団司令部に敵砲弾が命中、副官の幡野大尉が戦死、旅団長以下古見副官、水谷一生作戦参謀らは無事だった。

夜陰に乘じ敵退却

——独断で沙窩向け追撃の命——

沙窩付近の戦闘

九月十九日。連隊（第三大隊、第二中隊欠、野砲兵第五中隊、迫撃砲第一中隊、工兵第一小隊、軽装甲

車第二中隊配屬）は、余家集付近の敵を払暁攻撃する準備をしたが、敵が夜陰に乗じて退却して行ったので山田連隊長は独断で沙窩（しゃか）向け追撃せよと命じた。

沙窩は大別山のど元に当たる要衝、前日の雨も上がり、けさは大別山の山脈もくっきり見える。命令により第二大隊は余家集北側地区から唐湾北側地区向け前進、第一大隊は余家集南側地区から唐湾南側地区に向け追撃を開始する。連隊砲中隊が第一大隊の前進を援護、配属の軽装甲車中隊（軽戦車）は沙窩めざして突進する。

連隊長は予備の第七中隊に余家集の掃討を命じておき、本部と発煙中隊を率い、沙窩に向けどんどん進む。だが、途中の橋という橋は敗走中の敵によって全部焼き落とされている。このため工兵小隊が仮橋をかけて進撃路を確保していくが、その苦労は並みたくないではない。

午前七時二十分、旅団長から「第一線部隊は沙窩に向かい敵を急追すべし」との命が下った。同八時、余家集西側に進出していた連隊長は、折から同地へ進出してきた第二大隊工兵小隊、軽装甲中隊を掌握、同八時三十分、第二大隊（第七中隊欠）を前衛として沙窩向け進撃を開始した。同十時四十五分、第二大隊の先兵中隊が沙窩前方の呉湾（ごわん）部落に入ったところで、同部落南北の高地線に抵抗陣地を張る有力な敵と交戦を始めた。

このころ、余家集の掃討にでていた第七中隊も進出し、第二大隊に復帰した。

山田連隊長はただちに呉湾北側高地に出て敵情地形を偵察、追撃隊長（三浦第二大隊長）はじめ一大隊長、配属部隊に攻撃準備を命じ、同十一時五十分、軽装甲車中隊に道路および敵情地形の偵察を命じた。

午後零時五分、戦車からの報告によると敵は右前方三百呎（本道右側、沙窩南方）の高地に山岳陣地を築いていることが分かった。本道を見降ろしてバリバリ撃ってくる。第一線は散開し、地物を利用しながら前進していくが、死角に入ることが先決だ。

午後一時四十分、山田連隊長は呉湾東方地区に集結した部隊に歩三三作命甲第三五八号を下し、第二大隊は右第一線で李家凹北方高地の敵を、第一大隊は左第一線で沙窩東南方高地の敵をそれぞれ攻撃、沙窩西側に進出すべしと命じた。また歩兵砲中隊は呉湾北方高地付近に陣をしき、第一線両大隊に協力、追撃砲中隊は呉湾西側付近、野砲第五中隊は呉湾西北側台地から両大隊を援護、軽装甲車中隊の一部には敵情搜索をさせた。連隊長は呉湾西北側台地から沙窩東側高地に逐次移動し、指揮をとった。

敵は高地の要所要所に、えんがい機関銃座を配置、それらを結ぶ交通壕（散兵壕）をめぐらし、さらに高地上



夢のまた夢、ああ大別山



葉家集付近のトーチカと抗日文

には、かなり以前から望楼を構築している。すでにコケむしたトーチカもあった。これら沙窩、李家凹の陣地にこもる敵は第八十八師、第三十師に属する約二千人で迫撃砲や機関銃を猛射し、ガン強に抵抗した。

とくに右第一線となった第二大隊（三浦俊雄中佐）正面李家凹北方および東方高地の敵はしつように抵抗した。右翼、つまり本道右側に左側から第八中隊の二個分隊（機関銃一個小隊配属）同中隊の一個分隊、最右翼に第六中隊が展開、それぞれ激しい敵銃火の合い間をぬって高地の斜面をはって進む。後方の野砲第五中隊と大隊砲が敵銃座を吹っ飛ばす。

このころ、呉湾から沙窩方面の道路を敵情偵察に出かけていた軽戦車がこの地雷にふれてキャタピラが故障、立ち往生してしまった。ちょうど第八中隊が攻撃中の左前方の敵銃座にさらされている。二百メートル後方を走っていた友軍軽戦車がこれを認め、SOSを打ってきた。そこで第六中隊の二個分隊が救出に出動、同分隊は敵弾を浴びながら道路わきの軽戦車に小川伝いにとりつき、キャタピラを修理、みごと救出した。

こんな一幕もあったが、第六、第八中隊はじりじり肉薄、同三時半ごろ両中隊は前後して左右高地を占領、第八中隊主力はさらに四斗凹方面に進み、同六時同地付近の望楼高地も占領した。

左翼方面の第五、第七中隊は機関銃主力に援護されて本道左側を攻撃前進し、本道上を進撃する軽戦車とともに沙窩東側高地を抜き、同三時三十分には沙窩城内に突入したが、敵の抵抗はほとんどなく、無血

占領した。

一方、連隊の左第一線に展開した第一大隊（渡辺綱彦中佐）も野砲兵第五中隊、歩兵砲中隊の援護のもと沙窩東南方高地に猛攻をかけていた。左第一線に第三中隊（一小隊欠）右第一線に第一中隊（機関銃一小隊配属）が展開（第二、第四中隊予備）午後二時十分攻撃を開始、同三時五十分には同高地の一部要点を占領した。

こうして沙窩、李家凹の敵約二千は、死体約百五十を残し、西方および西南方に退却して行った。連隊は兵一人、馬三頭が負傷したにすぎなかった。山田連隊長は両第一線大隊長にそのままの態勢で夜を徹するよう命じ、旅団長に「第一線大隊をもって十六時三十分、沙窩およびその南方高地上を占領せり」と報告した。

だが、敵はさらに沙窩西方約千崙、南北の高地線に抵抗陣地を張っているのだ。連隊長は沙窩城壁東北の三軒屋に本部を進め、払暁の作戦をねった。

沙窩は土壁を張りめぐらした大して大きな町ではないが、大別山脈の中央に位置する要衝だ。城の西方を走るの北は光州、南は麻城に通じる道路である。道路に沿って幅五十崙ばかりの川が流れていた。揚子江や華中のクリークと違い、きれいな流れだった。将兵は思わずかけ寄って頭から清流を浴びた。しかし城内の民家は砲撃によって破壊され、みる影もなかった。

松野中尉ら8人戦死

——し烈を極めた敵の反撃——

沙窩付近の戦闘

翌九月二十日、わが進攻に対し、迫撃砲を持つ有力な敵は沙窩の西方約一^{キロ}の、南北にわたる山岳地帯に陣地を構え、必死の抵抗をみせている。旅団長は払暁攻撃を命じ、これに従って沙窩南側に本部を置く山田連隊長は同日午前一時十五分、歩三三作命甲第三五九号を下した。

右第一線として進撃してきた第二大隊は「午前七時攻撃を再興し、沙窩西方地区に進出すべし」との命により、麻城街道を横切り、川を渡って午前八時ごろには望楼のある高地に進出。左から第五（一個小隊欠、機関銃一個小隊配属）第七、第八（機関銃一個小隊配属）の各中隊を一線として、同八時三十分前方五十^{メートル}の岩山高地に攻撃を開始した。

吳灣付近に陣をしく野砲兵第二大隊は、この朝沙窩東南側高地に観測所を進め、岩山の敵に砲撃を加える。敵陣まではなだらかな斜面だが、頂上付近は名のとおり岩また岩の高地。わが方が陣取る高地より少し高い。敵は見おろすようにしてガン強に抵抗、とくにわが方の右翼は西方高地からの敵掃射に悩まされた。

砲撃終了と同時に、三浦大隊長は左の第五中隊に対し、敵の右側を突くよう命じた。同中隊の位置から敵陣までは深い谷間になっているからだ。予想どおり、前面ばかりに気をとられた敵は、右側の警戒がお

ろそかだった。敵陣にたどりついた将兵は大喚声をあげて一気に突入、不意を食った敵があわてるスキに第七、八中隊も斜面をかけおり殺到した。敵は先を争って後方の高地へ退却、午前十一時五十分占領、続いて第五中隊とそれまで予備だった第六中隊が追撃、午後五時半ごろにはさらに前方二百呎を占領、同夜は谷間の部落に露営した。

一方、左第一線の第一大隊は、第二大隊と同じ午前七時から攻撃前進、沙窩南側地区の敵を破ったあと左に旋回。左第一線第三中隊、左第一線第一中隊（いずれも機関銃一個中隊配属）第二、第四中隊予備で沙窩南方、清水塘部落の東方山地の敵を攻撃、正午ごろ前面陣地を占領、さらに第三中隊は同二時ごろ、一個小隊で次の高地も奪った。

また第三大隊（第九中隊二個小隊、第十中隊欠）は後方から追及、第二大隊西方の敵をおさえ、同時に両一線大隊の中間地区から戦果を広げるため、中第一線で沙窩西南方高地を攻撃した。左第一線第十二中隊、右第一線第十一中隊がそれぞれ機関銃一個小隊を配属され、午後二時攻撃を開始、標高二百呎ぐらいの第一望楼高地を猛攻、午後四時ごろ第一線陣地を奪取した。望楼というのは、昔内乱に備えてつくられた高さ約五呎、幅百呎にわたる石でかためた監視所兼トーチカ。コケむした姿は気味悪いほど、それ以上に銃眼をのぞかせた戦国時代の遺物は将兵を悩ました。

なお、第十中隊はこの日午前十時、旅団長直轄となり、柳家凹付近から快活嶺方面に出て敵の退路を断った。

午後五時三十分、山田連隊長は作命甲第三六〇号をだし、占領地を確保し、敵情を偵察しながら露営せ

よと命じ、第二大隊の一部を沙窩北方本道付近に出し、光州街道を警戒させた。

沙窩はすでに述べた通り、光州―麻城、漢口に通じる重要地点、装備の優秀な中央直系、傍系軍を配し、とくに敵の前進陣地とみられる沙窩南方の両側高地には、自然の要害のうえにさらにえんがし銃座、一連の散兵壕をめぐらし、迫撃砲、チェコ機銃でしつこく抵抗した。同日、前面の敵は第八十八師、第三十師の約二千で、死体約五百を残し、南方及び西方にひとまず退却して行った。しかし連隊も第十一中隊長松野亮作中尉以下八人の戦死と日高実幸獣医大尉、第十二中隊中岡正治中尉以下二十七人、馬二頭が負傷した。

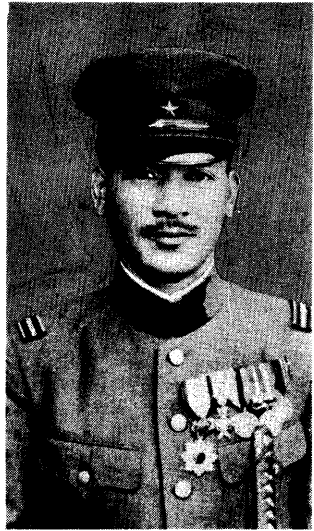
松野中尉、壮烈な戦死

——敵陣へ先陣を切り突撃——

沙窩付近の戦闘

九月二十日の戦闘で第十一中隊長、松野亮作中尉（金沢市出身、当時は津市上弁財町、戦死により大尉に進級）が壮烈な戦死を遂げた。同中隊指揮班の上等兵でいつも松野中隊長と行動をともにしていた別所常雄さん（六五）―久居市新町―は松野中尉の最期のもようを次のように回想している。

その朝、沙窩西南方面高地の敵陣攻撃を前にして、松野中尉は部下を集め、おもむろに口を開いた「去年のこの日を忘れていないだろう。北支に上陸したわが部隊が東賈庄、八房に初陣の火ブタを切った日である。その戦闘で山崎中尉以下多数の戦友が戦死した。くしくもきょうはその一周年の記念日というべき



松野亮作中隊長

日である。この日を大別山で迎えることは実に感慨無量である。昨年の八房のアダを討つべき日だ、よいか」

将兵たちは緊張して身動きもしない。

「本日の作戦は、沙窩西南方高地一帯を攻撃、奪取することだ。だが敵陣は堅固なうえ、兵力はわが方の数倍にものぼる大敵だ」

松野中隊長はさらに語調を強め「しかし、八房に憤死した戦友たちの霊はきつとわれわれを守ってくれるに違いない。そのつもりでみんな存分に戦ってほしい」

一度言葉を切って、決心したように松野中尉は、

「最後をお願いする。どうか君らの命を松野にくれ、俺も君らと共に死ぬ、終わり」

引きしぼるような言葉だった。敬礼しながら満足そうに部下のひとりひとりを見つめる松野中隊長の両眼には涙が光っていた。

（中隊長殿、ご安心ください、自分の命は確かに預けた）

部下も涙の目で誓った。

いよいよ攻撃開始、まず後方に陣取った野砲が砲撃の火ブタを切った。松野中隊長は右に、第十二中隊長が左に展開する。各中隊長に一個小隊ずつ配属された重機関銃がいっせいに援護射撃を始める。

「前イへ」

援護射撃のもと、兵士たちは行動を起こした。山はけわしく、敵の応戦も激しさを加える。

ヒューン、ビュッ！

敵弾が頬をかすめる。だが鬼神と化した将兵は岩ハダにツメをかけよじのぼる。山上に迫ると、敵は手投げ弾の雨を浴びせてきた。

「突撃！」

敵弾のサク裂する中に松野中隊長の号令が響き渡る。しゃにむに突っ込む。先陣を切る松野中尉は軍刀で敵をなぎ倒し、そのしかばねを踏んで敵陣深く突っ込んだ。敵味方入り乱れての死闘は午後四時ごろ終った。日の丸がひるがえり、バンザイがこだました。

第一線陣地を放棄した敵は、次の高地上の陣地にこもり、なおもしつように抵抗してくる。休む間もなく攻撃に移る。松野中尉は自ら敵情偵察に出た。そしてくぼ地から乗りだし、双眼鏡をのぞいたとたん、

ビューン



受弾して手当てを受ける松野中隊長

敵狙撃兵のねらった小銃弾が左胸を貫通、のけぞった。

「隊長殿！」

別所上等兵と森川衛生上等兵らがかけ寄る。衛生兵がハサミで装具の革帯と軍服を切り開き応急手当てを急ぐ。別所上等兵はすばやく日の丸の旗をだし傷口を押えたがみるみる鮮血が吹き上がった。松野中尉の顔は土色に変わり、すでに息もかすかだった。それでも力をふりしほり、

「敵は百俣前方の草むらにあり……」

指示した。なんという豪胆さ。別所上等兵は、ただ「ハ、ハイ」と答えた。すぐ伊藤上等兵と二人で沙窩の野戦病院にかつき込む。土壁でかこっただけの吹きさらしの民家だった。松野中尉は、木ワクにナワを組み、ワラを敷いただけのベッドに横たえられた。夜になると星の光が降りそそいだ。

翌二十一日夜半、容体は急変、酸素吸入もむなしく息を引きとった。付き添い当番兵の泣き声に、離れた病室の負傷兵ももらい泣きしていた。

松野中尉は武士かたぎの豪胆な人物で、信念、責任感ともに強く、部下をよくかわいがった。大隊長はじめ将校、兵ともに松野中尉には絶対の信頼をもっていた。野々正巳少尉（員弁郡藤原町）が中隊長代理となつて第十一中隊の指揮をとった。野々少尉もなかなか勇敢だったが、やはり松野中尉を失った中隊の士気が落ちたことはいなめなかつた。

こうした松野中尉と日ごろから意気投合していたのが同じ大隊の第九中隊長、太田雄三中尉（津市船頭町三三八一、P—一〇三一）であつた。そのころの沙窩南方高地から約千俣離れた地点の旅団司令部を警

備していた太田中尉は、伝令から松野中尉の負傷をきいてすぐに野戦病院にかけつけた。

「太田か。とうとうやられたよ、でも大丈夫だ」

深い傷にもかかわらず松野中尉は元気だった。

「おれがいつも注意していたとおり君は姿勢が高かったからやられたのだよ」

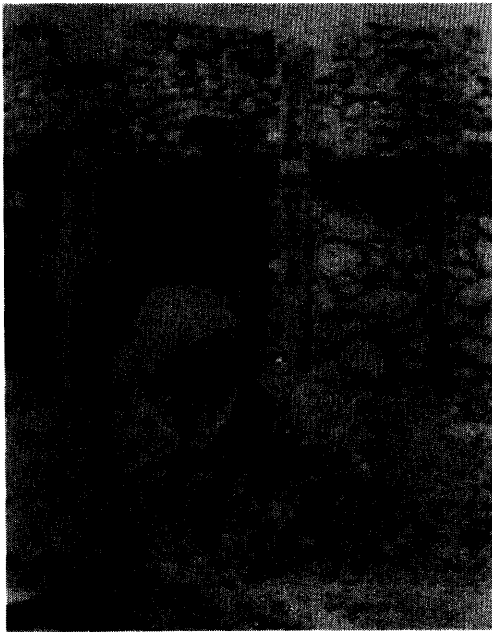
と笑って元気づけたが、軍医はもうとてもダメだと首を左右に振っていた。翌日の夜、太田中尉は旅団司令部で彼の死を聞いた。

松野、太田両中隊長は戦地ではじめて会ったが意気投合、よく酒をくみ交した。上田孝大隊長も両中隊長を頼りにし、戦闘といえは必ず両中隊を交互に使ったものだ。

オレたちばかりこき使うな、と大隊長に苦言を呈するほどだった。

武安当時（その年の三、四月ごろ）のエピソードの一つ。そのころ二人は顔を合わせれば飲んだ。その日もかなり酔っぱらっているところへ大隊長から集合命令がかかった。

「松野、行こう」



沙高城内に建てられた松野大尉墓

太田中尉は立ち上がったが、

(すぐ行くよ)

と返事だけ。案の定集合に遅れて酒ぎらいの上田大隊長から大目玉をくった。しばらくすると当番兵が顔をかえて太田中尉のところへかけつけた。

「松野中隊長どのが自室にカギをかけてこもったきり出て来られません。だれが声をかけても部屋に入ってくれません。拳銃の音がしますので心配です」

太田中尉は(しょうのないやつ)と腰をあげた。

「太田だよ」

「はいれ」

やっとな返事があつた。

「どうしたのだ。おれにだけはわけを話せよ」

太田中隊長がなだめると松野中尉は、

「酒を飲んで集合に遅れたため、みんなの面前で大隊長にしかられた。男としてこれ以上面目ないことはない、よって自決する」

と、ピストルを握り直す。

「まあ待て、待て」

太田中尉はピストルを取り上げ、どうやらなだめた。

遺族は妻雪子さん（戦災後津市から名古屋に転出）長女昭子さん、二男宗博さんがいる。

雪子さんは「松野は禅宗を信仰していましたので、心の修業が出来ていたようです。自宅にいる松野はやさしい父親で、子供にやっこダコを作ってやったり、馬になって背中に子供をのせて部屋をはい回ったり：戦死の直前だったと思いますが、最後の手紙には「きょうは戦友の弔い合戦だ。手ごわい戦闘だが、おれは不死身だから戦死などしないから安心せよ」とありました」と、当時を語っていた。

強腕から手投げ弾

——沢村栄治一等兵敵弾も投げかえす——

沙窩付近の戦闘

沙窩南方に戦線を拡大する連隊も二十一日は敵陣と相対したまま戦況ははかどらなかった。金森軍曹以下三人の負傷者を出し、機関銃弾一万二千発、小銃弾六万二千発を消費したが、戦果をあげることが出来ず、午後一時、連隊長は「明払曉を期して磨盤山（まばんさん）付近を攻撃する」（歩三三作命甲第三六二号）と命じ、敵情偵察、攻撃準備をさせた。

敵は磨盤山、揚家寨（ようかさい）一帯に兵力を増加、抵抗陣地を強化している気配だった。夜に入ったが、その後新しい敵情報告はいらず、午後八時四十三分、山田連隊長はふたたび、「明払曉重点を左翼に保持し、前面の敵を攻撃し、磨盤山東西の線に進出せんとす」という作戦命令甲第三六二号を下し、着々準備をさせた。

二十二日、この日も朝からの雨は降ったりやんだり、どうやら本格的な雨季に入ったようだ。大別山の峰々はかすみ、視界をさえぎっている。陣地はぬかるみと化し、コケむした岩ハダはぬるぬるすべり、攻撃前進は困難を極めた。午前七時三十分、山田連隊長は第一線に攻撃前進を命じた。

中第一線の第一大隊（渡辺綱彦中佐）は磨盤山の前方「鉢巻山」から攻撃にかかった。鉢巻山はびょうぶを立てたように切りたつけわしい山。山頂付近には細い木を組み合わせたろくさい（鹿砦）を張りめぐらし、えんがし銃座を据えつけている。ちょうどハチマキを締めたようなかつこうなので将兵たちは鉢巻山と命名した。山岳戦では攻撃の便宜上必要なのでこうした適当な名前をつけたもので、あとに出てくる「一文字高地」「西山高地」「清水山」などいずれも山の形、活躍した将校名を冠したものである。

第一大隊正面の敵は訓練された正規軍で、ガン強に抵抗した。左第一線に第三中隊が展開、野砲兵第二大隊、連隊砲、迫撃砲、速射砲の猛援護のもと雨をついて肉薄、制圧



さあ出陣だ、大別山（磨盤山）へ

射撃終了と同時に突撃、十時磨盤山最高峰北側陣地を奪取、第四中隊はさらに前面の高地も奪った。だが、ろくさいにこもる敵はなかなか手ごわい。渡辺大隊長は障害物破壊のため、工兵一個小隊の配属を要求、さらに予備の第二中隊（中隊長、野田巳一中尉、昭和三十六年末病没）を第一線に進め、前方第二峰攻撃を命じた。

第一大隊副官から中隊長になった野田中尉は、これが初の第一線指揮だ。突撃以外に手はないと判断、重火器の援護を要請した。間もなく野砲はじめ歩兵砲の猛撃が始まった。敵陣との距離が近く、砲弾がうなるたびにキモを冷やした。

最後の砲弾が白煙をあげてサク裂した。これが突撃敢行の合図だ。将兵は右側面の山頂からウ回しながら鉢巻山の前面に接近したが、がんじょうに組まれた高さ一桁のろくさいにはばまれてしまった。そこで爆薬を背負った工兵隊が前進、煙幕を張り、その中へ突進していく。やがて煙幕をつんざくゴウ音、ろくさいの丸太が吹っ飛ぶ。

「それッ」

中隊はすかさず突進を開始、山頂へかけのぼる。岩かげに身を伏せてはしゃにむに引き金をしぼる。

同中隊の軽機分隊には巨人軍投手の沢村栄治一等兵（伊勢市出身、大東亜戦争で戦死）が属していた。

彼は軽機を抱くようにして岩をよじのぼり、猛射を始めた。そのうちタマが尽きた。軽機を捨て、強腕から手投げ弾を投げる。頂上からころがしてくる敵の手投げ弾も素早く拾っては投げかえす奮戦ぶりだった。

（「大別山従軍記」から）

第二中隊長代理だった一志郡嬉野町宮古、川村可夫さんは次のように思い出している。「沢村一等兵は、大別山にはいつてからの補充で到着、第三小隊にいたかと思う。なにしろ激戦続きで精神、肉体ともに消耗し切っており、彼の在隊を知る者は少なかった。わたしも漢川から雲夢にはいったころ読売新聞記者がたずねてきて初めて知りました」

野田中尉、両眼に破片

鮮血にまみれ自ら伝令

沙窩付近の戦闘

第二中隊が山頂に迫ったところには、すでに日は暮れようとしていた。雨雲に閉ざされた大別山の日没は早い。敵陣五、六回の地点まで進出すると、手投げ弾がうなりをあげて降ってきた。薄ヤミの中に敵兵の動きが見える。敵の手投げ弾がとだえると味方が応酬、わが方が岩かげの死角に入るとこんどは敵の活動の番だ。

このときただ一人、山頂に頑張って軽機を撃ちまくっている兵がいる。よくみると二郷瀬平上等兵（尾鷲市矢の浜出身、二十一年病没）だ。日頃無口でおとなしい彼の仁王立ちの勇姿に中隊長も驚いたものだった。殊勲甲が贈られたのもちろんである。

軍刀を振りかざし、山頂へ一気に突っ込もうとした伊藤源五郎准尉（久居市）が手投げ弾で右手を負傷、続いて野田中隊長も両眼に手投げ弾の破片を浴び、鮮血にまみれた。

「隊長殿、大丈夫ですか」

と、かけ寄る部下。増援を求めてダメ押しをしよう、と判断した野田中尉は右手に軍刀をつかみ、左手で血のしたたる両眼を押さえながら自ら伝令となつて山をかけおりて行つた。

（一刻も早く連絡をつけないければ……）と、部下を気づかう野田中尉の姿は、悲壮だった。敵弾が飛びかい、サク裂する中を岩につまづき、何度か倒れながら約三十分後には友軍陣地にたどりついた。渡辺大隊長は残る予備の第一中隊に急拠前進を命じる。

一方、山頂で死闘を続ける第二中隊の将兵は、増援の部隊に勢いづき、最後の力を振りしぼり、断ガイ高地に突入して占領（午後六時二十分）、さらに続く高地をも占領、同七時三十分山頂に日の丸を打ちたてた。『鬼神も避くるがごとく勇壮なりき』と戦闘詳報に記録されている。

一方、左第一線の第二大隊（三浦俊雄中佐）Ⅱ第七、八中隊欠Ⅱは朝から濃霧に悩まされながら攻撃前進し、午前九時ごろ大岩東北方千呎の地点に進出、ここで前日から旅団直轄となっていた第十中隊を掌握、吊橋湾向けて進み、左第一線第十中隊、右第一線第五中隊、予備第五中隊で揚家寨を攻撃、同十時十分占領、ついで李家門の敵に対し攻撃を続行しながら第一大隊の後ろの方へ進出した。



山頂へ一気に突き込もうとした
今の伊藤源五郎さん

この日、第八中隊は旅団警備のため大隊長の指揮を離れ、また第七中隊は第三大隊に配属されていたが、濃霧のため方向を誤り、連絡がつかぬまま東楼東方高地に出てしまっていた。また右第一線の第三大隊（上田孝少佐）〓第九中隊、機関銃一個小隊配属〓は左から第十二、十一、九各中隊を配して濃霧に悩みながらも小馬黄冲高地を攻撃、午後三時二十分ごろ、それぞれ前面の敵を撃退、その態勢のまま露営した。

こうして夜八時ごろには第二大隊は李家凹北方一〇に進出、いぜん敵右翼背に対し、攻撃を続行。第一、第三大隊は敵情偵察をしながら、次の準備をした。午後六時五十分、山田連隊長は命令を下し、「沙窩の川は敵方向より流るるをもって水の使用に注意のこと」とつけ加えた。通信班は第三、第一兩大隊間および旅団司令部との間の有線連絡、また第二大隊との間の無線連絡に活躍した。

この日連隊正面の敵は第八十八師、第三十師、第二十七師に属する精銳約三千、約五百の死体を残して退却した。連隊も斎藤政吉曹長以下十三人が戦死、第二大隊長三浦中佐、第十中隊長加藤祐造中尉、第一中隊坂井武勇少尉、第一機関銃中隊長広七郎中尉、同小隊長伊藤英准尉ら五十六人が負傷した。

磨盤山東西高地に退却した敵は後方から続々兵力を増強、二十二日夜半から二十三日にかけてたびたび逆襲をかけてきた。とくに右第一線の第三大隊、左第一線の第十二中隊（一個小隊）は午前四時三十分約百人の敵に襲われ、かろうじて撃退した。前日から連絡を絶っていた第七中隊（後述）は午後三時過ぎ沙窩にたどりつき、また旅団警備にでていた第九中隊も同七時本隊に復帰。この日は敵と対じのまま暮れたが、逆襲により田中軍曹が戦死、西山軍曹以下十九人が負傷した。

陣地交換で地雷爆創

—— 広中隊長、背部など三十八カ所に ——

沙窩付近の戦闘

九月二十二日の沙窩南方高地の戦闘で第一機関銃中隊長、広七郎さん(七〇)伊勢市上野町は地雷爆創を負った。この日、同中隊は、第二中隊に協力して鉢巻山の敵陣を猛射した。

りよう線上に出た同中隊は広中尉の直接指揮で射撃したが、敵はがん強で日没となってしまった。

「機関銃は山を下れ」

大隊命令が下った。歩兵の援護に威力を見せる重機も自衛力がないから夜間の戦闘には向かない。広中尉は各小隊に陣地交換を命じた。雨は相変わらずしとしと降っており、あたりはすでに真っ暗。中隊は広中尉を先頭に一



現在の広七郎さん

列縦隊となって移動をはじめた。鉄条網を二層幅ほど切断した突破口が後方との唯一の連絡路だった。まず広中尉が鉄条網を踏み越え、続いて中川景男上等兵(鈴鹿市南若松町出身)四人目に指揮班長の西

川均伍長（尾鷲市三木里町）の順で通った。三番目の岩崎憲一上等兵（松阪市稲木町）が通ったあと、敵の地雷が爆発した。ドカーンッ

大音響の瞬間、広中尉は背中にショックを受け、のけぞった。防寒外とうが吹つとび、右手に握っていた軍刀がヤミの中へ吹きこまれてしまった。こん倒状態からさめると、広さんの脳裏をよぎるのはまず（部下は？）ということ。地雷に触れた岩崎、その前を歩いていった中川両上等兵は約三十呎の谷底に吹つとばされ、ともに足を切断、即死していた。地雷から前にいた広中尉は背部、後頭部などに三十八箇所、後ろにいた西川伍長は顔面、胸部などにそれぞれ爆創を受け、衛生兵一人は両眼をやられ血まみれだ。

広中尉は立ち上がったが出血がひどく、指揮班の西飯栄（志摩郡浜島町浜島）奥岡寅男（員弁郡員弁町市之原）の両上等兵に背負われて仮包帯所にたどりつき、翌二十三日師団野戦病院で手当てを受けたのだった。

広さんは「鉄条網は昼間第一線が突破したもので、数十人の兵が踏み越えて行つたが、だれも地雷にふれなかった。われわれはよほど運が悪かったのですね」十四年一月退院して漢川で原隊に復帰、こんどは第二機関銃中隊となった。大正十二年兵。満州駐在、三三補充隊歩兵中隊長を経て十三年四月三三機関銃中隊長に任ぜられ単独赴任（順徳）、十六年九月第十六師団兵務部、十八年近衛歩兵第四連隊大隊長、十九年独立歩兵一四七大隊長（少佐）、二十年六月シンガポールに上陸し終戦。地雷創を受けた背部は最近薄らいだが冬になると痛み、右耳はいつも鳴り続き、聴覚不能である。

西川さんは「気がついたときはタンカの上でした。この日、戦友の片岡保次上等兵（鳥羽市河内町）か

ら「西川、顔色が悪いぞ、やられないよう気をつけろよ」といわれていました」と回想、また西飯さんは「広中隊長が、気がついて真ッ先にどなったのが「おれの軍刀はどこへ行ったか」でした。ヤミの中を探し回りました。私のじゅばんを着せ、奥岡君と二人で背負って山をおりました」と語っている。

一人で砲撃ちまくる

——堤さん、忘れ得ぬ紫金山攻略戦——

沙窩付近の戦闘



堤さん
てき弾筒手の堤さん

伊勢市中須町一七四六、堤正男さん(六七)第二中隊第三小隊四分隊Ⅱは、鉢巻山の総攻撃に左第一線で参加、戦友を探しに出かけて負傷した経験の持ち主。堤さんは十二年一月十日入営以来、十五年一月除隊するまで毎日克明に従軍日記をつけていた。戦地から持ち帰った手帳はいまも大切に保存されているが、それには部隊の動きが毎日丹念に書きとめられ、戦闘地の風景もスケッチされている。その従軍日記には、鉢巻山攻撃前後のよう

が次のように記されている。

【十八日】前衛本隊となり、旅団本部、連隊本部とともに行軍、午後一時半より左側前衛となって高地

に登る。敵無数おり射撃す。道路南八百呎、連隊副官とともに敵陣地によじのぼる。戦死西井、負傷田中。

【十九日】早朝から遺骨をおさめるため火葬する。同地（沙窩）を午前十時半出発、衛生兵と行動を共にして行程約二里半、第二の防備線あり。わが中隊は大隊の左第一線（街道の左）となつて攻撃していた中隊本部の位置不明のため旅団本部（野砲陣地あり）に宿営。

【二十日】早朝攻撃をするのことを我らの岩田伍長連絡に来る。（我らの人員は一、二、三分隊で十人、馬ひき四）宿舎の位置から約千五百呎位であつた中隊に復帰して戦闘に参加。午後二時半攻撃前進して南進。

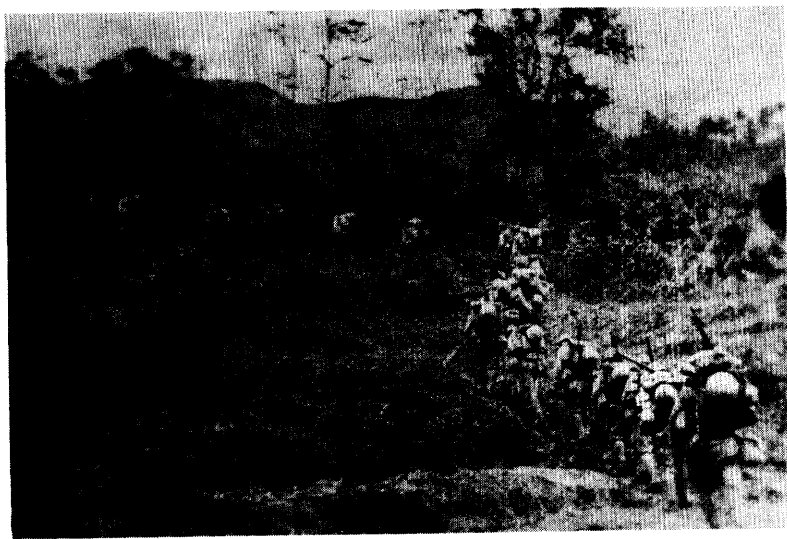
【二十一日】〇〇高地（高地の名称不明）を占領した第三中隊一個小隊の左に出て陣地を占領、同地は沙窩の東方約二千呎で、敵の行動がよく見える。

【二十二日】払暁を利用して第三中隊、前方の高地を占領、ついで第四中隊その次の高地を占領、その次をわが第二中隊が攻撃、迫撃砲の集中攻撃を受け、負傷者続出。友軍も連隊砲を敵陣地に集中射撃したが、前進不能となる。時に午後五時。第一中隊と一線を交代。

この攻撃のとき、ふと傍をみると坪谷貫一さん（十二年兵、多気町佐奈）が負傷している。堤さんたちは近くの松の木を切つて、天幕に包んだ坪谷さんをつるす格好で山肌を退却。坪谷さんがうめき声をあげるのが、近くにひそむ敵に聞こえないかとハラハラ、「声だすな」と思わずしかりつける。それでもきれぎれの声で「おかあさん」とくりかえす。担いでいる堤さんらは、胸がしめつけられるようだった。必死で谷間に下りついた時は、坪谷さんはすでにこときれていた。

また翌二十三日、平田宇助さん（十一年兵、松阪市出身）が帰っていないことが判明、第二中隊の占領地区に残置されているに違いないと収容に向かうことになった。遅い朝食のあと正午すぎ、前日の高地に行くと、応援隊がきたと見た敵が集中砲撃してくる。倒れている平田さんの姿が見えるが、収容にとびだすことができない。それでもなんとかしようと飛びだしたところへ弾がとんできて、堤さんの左けんこう骨にあたった。堤さんは病院へ運ばれたため平田さんを自分の手で収容出来なかった。「出撃の前夜、あしたは総攻撃やようけ食つところや、と豚を殺して油いためで食べました。その時炊事当番だった平田が、堤さんにはいっぱい入れたろ、いうて、私のはんごうにギュウギュウと豚肉を詰めてくれたものでした」と戦死してしまった平田さんの思い出を語っていた。

また堤さんにとって忘れられない戦闘は紫金山第一峰攻略戦だ。ここでは第一大隊は参加せず、第二中隊が連



大別山麓を黙々と前進する郷土部隊

「私が撃ち終わったとき
一峰攻略戦は終わってしまし
た。あの頃は元気がよかった」
と、当時を回想している。

堤さんは十一年兵、十二月
一日入隊、軍旗護衛兵だった
こともある。



雨の中、闇夜に下山

——第七中隊敵スパイにはかられ——

沙窩付近の戦闘

大別山の戦いで、一時的だったが消息を断った「消えた第七中隊」の話。

松阪市高町、木田三雄さん(七三)「元松阪高校教諭」がそのときの中隊長だった。

九月二十二日、連隊は磨盤山―水谷山東西の線の敵を攻撃することに決まった。第三大隊が右第一線に、さらに第七中隊も右第一線に展開した。同中隊は前日から同大隊に配属されていた。朝の濃霧につき、右前方の高い山めざし、前進を開始する。一列縦隊となってあえぎあえぎ山道を登る。しばらく行くと支那人(現地人)がひとり降りてくるのに出くわした。向こうはギョツとして立ち止まったが、愛想笑いを見せ「ニイ、案内します」と手ぶり、身ぶりという。

「そうか、じゃあやってくれ」

木田中隊長は、まさかこの男がスパイだとは気がつかず、何の疑いもなく目的の山を指示した。

ところが、ここにも誤算があった。中隊が攻撃を命じられた山は実はもっと手前の山だったのだが、何しろ弾雨の中で命令受領、ずっと遠くの山だと聞き違えていたのだ。一帯はススキや雑木が茂るだけのハゲ山に近い山。すでに日は西に傾きかけているというのに、行けども行けども敵の気配はない。(さては?)前を行く支那人の背をにらんだが、男はこのこ歩き続けていく。やがて頂上近くに差しかかる。付近に